明治二十八年四月二十三日發行

女鑑

第八十四號

東京國光社

女鑑第八十四號目次

少將



時文に就きて

今の世態、にはかに看れば、文學、はなはだ、盛、かつ、大にして、一切、文事に屬するものは、萬につきて、遺漏あることなく、またく、完美充善といふべきに足るが如く、大小學舍の繁榮なる、教員、生徒の衆多なる、新著作の重層たる・新廣告の頻煩たる、一々、枚擧にいとまあらず。しかるに、この現象たる、鏡花水月と、一般にして、決して、憑むに足らざるなり。そが中にも、小說、傳奇の類、唱歌、歌謠の類にいたりては、日刊月梓、ほとんど、間斷あるを見ず。されども、その作風にいたりては、萬篇一律、模型をおなじうし、陳

腐蕭索。すこしも、生氣、趣味なきもの、滔々として、みな、然なり。文章、盛なりといはんよりも、むしろ、衰へたりといはざるあたはず。乃、往々、大家、名匠の閒出するものありて、やゝ、見るべく、聞くべき作なきにあらずといへども、これ、なほ、曉天の星の、寥落として、疎なるが如きに過ぎざるなり。いはんや、その文、かならずしも、妙ならず。その辭、かならずしも、佳ならず。むしろ、やゝもすれば、流行におちいり、時樣にながれ、或は、人をして、嘔吐睡眠をもよはさしむるものなきことあたはざらんとするをや。有數の大家、すでに、かくの如し。その餘は知るべきのみ。これを、いかでか、文章のおとろへずして、盛なりといふを得ん。

文章の衰運、すでに然り。然らば、則、その衰運を挽回せんこと、これ、今

日の要務ならん。もし、今にして、これを撿せず、因循、かつ、時風に委ねなば、その弊、つひに、計るべからざるものあるにいたらんとす。あゝ、奢るものの久しからず。今の世、紛々、才華を衒ひ、詞藻を誇るものは、これ、なは、平氏の、歌舞管絃、遊嬉悠々、ながく、以て、滅亡せるものに異ならず。要するに、文章の弊、今にして救はずば、かならず、まさに、大に悔いざべからざるものあるにいたらん。これを救ふ方、まづ、すべからく、女子教育より始むべし。何となれば、女子は、他日、人の母となりて、幾多の兒女を訓育すべき任務あるものなれば、人の母が、知らず、識らずの間に、その兒女を感化する力は、はかるべからざるものあるべければなり。その方いかに。いはく、他なし。女子の教育、學校、家庭、ともに、學科を簡潔にし、その習慣を高雅ならしめ、

以て、我が國固有の粋氣を涵養し、發揮すべし。たゞ、よく、かくの如くにして、しかる後、奎運維新、文章儼乎、面目をあらため、時風世俗、また、したがひて、丕變大革、斐然として、眞個文明の域に達するにいたらん。洋化夷臭、卑野猥雑、頭亞尾歐、半變半化、いとふべく、忌むべき風、蕩然として、烏有に歸せん。こゝに於いて、はじめて、文章盛なりといふを得んか。

論説

婦女のたしなみ

岩下方平

婦女のたしなみ、いづれはあれども、取りわけ、たふとく、且、重きは、愼の一字にぞあるべき。才色、いかに美しくとも、品行を愼まざらば、決して、美

人といふに足らず。いはゆる美人は、これに在りて、かれに在らず。もし、ただ、才色の美しきが故に、果して、美人といふべくば、青樓の賣婦、教坊の校書、世に、これほど、美人といふべきものなからんとす。美人、あに、何ぞ、かくの如きものならんや。

姿色は、天稟にして、變ずべきにあらずとも、才にいたりては、學びて、以て、いかやうにも化せしむべきなり。果して、學びて能くすべくば、また、何ぞ、學びて、以て、これを得ることに躊躇すべき。才達し、學熟すれば、よく、品行を高尚にし、威儀道徳を神聖にす。およそ、婦女にたふとぶところは、禮に在り。敬に在り。禮あり、敬ありて、而る後に、愛嬌あり。古今、何等の婦女といへども、いまだ、曾て、愛嬌なくして、而して、美なるものはあらざるな

り。いまだ、曾て、愛嬌ありて、而して、美ならざるものはあらざるなり。國の興るは、衆の和に因る。家の齊ふは、夫婦の和に因る。和、やがて、禮なり。敬なり。而して、愛嬌の、由りて生ずる所以たり。古歌に、

つゝしみは朝な夕なの言の葉の
　　たゞかりそめのうちにこそあれ

それ、禍は、忽なるに生じ、福は、懼るゝところに來る。懼るれば、かならず愼み、忽なれば、かならず荒む。たゞ、それ荒む。ゆゑに、禍あり。たゞ、それ愼む。ゆゑに、福あり。禍と、福との間、千里にして、一念の差、絲毫のみ。何ぞ、切に、恐懼して、ふかく謹愼せざるを得んや。あゝ、禍福、門なし。たゞ、招くところに來る。まことに、その彼の惡みて遠くすべく、此の求めて

近くすべきを知らば、よろしく、愼みて、品行、道德を正しうし、和を以て、家を治め、愛を以て、人に交はり、儀容、いかにも嫋に、風標、いかにも優なることを心とせずはあるべからず。古より、一言にして、離別の悲に遇ひしものあり。一宵にして、百年偕老の約を誤りしものあり。或は、覆水の、盆に復らざるを憾み、或は、破鏡の、圓なりがたきを嘆く。みな、云ふことを愼まず、爲すことを薄きを以てなり。古、かくの如きに、今は、更にはなはだしく、旦に嫁ぎて、夕に去り、昨は好して、今は惡む。妻を見ること、賤貨の如く、夫を思ふこと、弊履の如し。去るも、就くも、情に任せ、嫁ぐも、娶るも、利を論ひ、萍合絮著、禮なく、義なく、輕々薄々、ほとんど、いふべからざるものあり。これ、蓋、時の勢なりといふといへども、しかも、その此に至る、あに、婦女た

るもの、おほむね、節操なく、徳を修めず、行を愼まず、不羈自由の義を誤解し、個人獨立、共和同權など、泰西奇僻の迂說に陶鎔せられて、暗に、皇朝婦女固有の粹精粹美の淑德を藐視するが故ならざらんや。

世界の大勢に就いても、文明進步の故に於いても、今より後、我が國家、善良淑婉の婦女を、須要とする、もとより、喋々を俟たざるなり。世の途にあたる婦女は勿論、人の妻たり、室たり、姆たり、母たり、もしくは、子女、これを詮するに、すべて、おの〳〵、應分の責あるもの、それ、愼みて、三省九思の義をわきまへ、言行、いやしくもせず、風俗嫻ひ、善く和、克く愛、以て、まことに、賢、かつ、美なる、紫女の如く、清女の如く、少くとも、無鹽を駕し、宿瘤を壓すべきに至らんことを、平素の念とせざるべからず。

女子處世論（十九）

三輪田眞佐子

第十八　樂しき家風

墨子といふ文に、安居なきにあらず。われ、安心なきなりとあり。誠に、ひさかたの天の下、あらがねの土の上、決して、廣からざるにあらざれど、若、人道を離れて生存せんには、身を容るべきところなからん。從ひて、人生の快樂なかるべし。女子は、二樣の世界に住むものなり。乃、この住める世界の外に、亦、一家の內に、一天地を作るべきものなり。この一家の天地は、小なりとはいへ、樂しき家風を作らんには、その精神は、無限に逍遙し得て、幸福、こよなかるべし。あながち、一家の外にのみ、樂事あるにあらず。

人は、霞たなびく春の朝、木の葉ちる秋の夕、くまなく、精神を吐露して、そ

の嬉しさ、悲しさ、又、あらまほしきこと、あらずもがなのことなどを、睦がたりするばかり、樂しきはなし。されど、人、名利のみを求め、今日の知人、明日の仇敵ならんも知りがたき、所謂、ものいへば、くちびるさむき秋風の吹く世には、かゝる樂は、なすに由なし。唯、女道を守り、良人より、深く愛せらるゝ妻のみは、その夫と共に、かゝる樂をなし得べし。古歌に、「大船のおもひたのめる君ゆゑにつくすこゝろは惜しけくもなし」とあり。果して、かゝる心づくしの妻あらずば、誠の樂を味ふこと、難からんか。昔、松浦佐夜姫といふ女ありけり。その夫、朝廷の御使にて、唐へ渡らんとて、舟に乗りしとき、いたく、その別を惜みて、遙に離れ行くをば見送らんとて、高き山の峯にのぼり、領巾もて、霞たへ〴〵に招きしかば、見る人、感涙せざるものなかりしよ

り、その山を、領巾麾峯といふとぞ。かゝる夫婦のなせる生活こそ、樂しき家風を作りしならめ。苟、女子を教育するものは、決して、かゝる操情を害すべからず。若、一朝、その教育の方針を誤らんか。天下の女子、冷淡無愛の風よ化し、從ひて、社會は、寒燥無味の俗とならん。されど、愛戀もて、風俗を亂せよにあらず。

おのれ、歐陽修の、瀧岡阡表といふ文章を讀む毎に、いまだ、涙の流るゝを覺えざるときなし。そも〳〵、修は、宋代の文豪大才なり。されど、母の教なかりせば、凡夫となりて終りたるかも知るべからず。その修を教へしことを見るに、曰はく、汝が父は、吏となりて、廉なりき。且、俸祿うすきに、自、儉約して、貧人に施すこと多かりしをもて、死ましとき、毫末だに、餘財なかり

き。唯、汝が、自力をもて、出世せんことを望みしなり。汝、いそみはげめや。亦、汝が父は、そのなき母を祭る毎に、涕泣していふやう、母君存命のときは、恒に、貧しうして、孝養足らざりき。今は、餘あるものをと。亦、汝が父、判官たりし時、なほ、嬰兒なりし汝を回顧し、いふやう、あはれ、人、誰か、生を願はざらん。されど、今や、法のため、死ぬべきもの多しと歎きゝ。その心、仁に厚きこと、かくの如し。汝も、父に似よかし。云々と。うべなり。修の非凡なりしは。果して、天下の母たる女子、かゝる心をもて、賢子を育てんか。そのたのしみ、たとへんに、ものなかるべし。いふなかれ。女子に樂なしと。

その他、老木の親を安んじ、兄弟姉妹とおたしみ、婢僕は、恩徳に感じて、命

のまゝに勤むるなど、總て、和氣靄然たるたのしき家風を作り、傍より見るもの、これを欽慕し、聞く人、これを感服して、そが家の園生の草木は、一層薫しく、犬、猫さへも、平和になれて、たのしむめりと、思はるゝばかりの家風を作るべし。されど、かゝる家風は、女子、自、春風の如き徳性を具へ、勞を厭はず、苦を忍び、輕快なる家事を果すにあらずは能はじ。元來良人の、酒色に耽るは、天然の惡しき性質によることもあらん。なれど、たま〳〵、妻のなすこと、言ふこと、その意に適はず、從ひて、本面目に、世務を勉勵することを欲せざるより、放蕩に流れそめし例もあり。なほ、子女の、訓戒を守らず、婢僕の、命令を奉せざるは、女子の不幸なり。あはれ、女子の一顰一笑は、忽にすべからず。

樂しき家風を作らんと誤了して、華奢に流るゝ勿れ。華奢は、永遠なること能はずして、平和團欒の仇なり。樂しき家風は、反りて、節儉にして、且、質實なる生活をなす人にあらずば、なし得ず。凡、女子は、入るを計りて出だし、恒に、分限を離るべからず。梅花は、質實なり。故に、さかり久し。櫻花は、華美なり。故に、散ること速なり。されば、いふなかれ。人は、師に乏しと。宇宙の現象は、悉、師ならんかし。

史談

少將

大町桂舟

陽春三月、都の空には、桃媚び、櫻わらひて、而吹く風も、のどけく、心、そゞろ

に浮きたつまゝに、昨日は、墨田川の花に蝶と共に戯れ、今日は小金井の櫻に蜂と共に狂ひ、綺羅、袂を聯ね、歌吹、海を涌かせど、楊柳、影暗くして、孤墳、露滋き處、烈婦の香魂を吊ひ、義士の英魄を慰めむとするもの、それ幾人ありや、つらつら看ずるに、仇なる浮世の花は、はかなく散りうせぬれど、うるはしき心の花は、千歳を經て、猶、にほへり。泉岳寺畔、累々たる義士の墓には、香花、今も猶、絶えず。木母寺邊、肅寂たる孤兒の塚を過りては、誰か吊悼の涙に咽むざるべき。げに、めづべきは、心の花なり。感ずべきは、忠臣烈女の行なり。吊悼の際、心に冥感するもの、或は徒に書を讀むにまさる益あらむ。殊に東京の近傍には、烈女の墓ども、多ければ、心あらむ人は、時に行いて、古を吊ひたまふべきなり。

前號にものしたる眞間の手兒奈の祠は、鴻の臺の麓にあり。兩國橋よりは三里ばかりの路程にして、一筋路なり。また、吾嬬社は、日本武尊の妃、橘姫を祭れる處なるが、龜井戸天神を過ぎて、木下川梅園のかたにゆけば、小川あり。橋をわたり、川に沿ひて右にゆくこと、二三町にして、一簇の森あり。そこに吾嬬社あるなり。傳ふらく、橘姫の御亡骸、こゝに漂着せしかば、祠を立て、祭りたてまつれるなりと。

相房武総の海岸には、なほ他に、かく傳へて、橘姫をまつれる處多けれど、未だ何れの地が眞なりやを知らざれど、橘姫の御靈をいつきまつれる處なれど、いづれも、尊くとも尊し。此社は、日本橋よりは、二里に足らぬ路程なり。やゝ遠けれど、伊坂村に、源義經の妾、靜の墓あり。此村は栗橋停車塲の近傍なり。さてまた栗橋停車塲は利根川の側にあり。東京よりは十四五里の路程にて、上野より汽車にてゆかば、二時間もたゝぬうちに、靜の墓前にぬかつくを得べし。傳ふらく、靜、鎌倉をいでたるのち、奥州なる夫を尋ねむとて、はる〴〵尋ね行きたれど、遂に逢ふを得ずして歸りしが、かなしみのあまり、此村にいたりて、遂に自害しけるなりと。栗橋と利根川を隔て、中田村といふ村あり。そこなる古寺に、靜が當年鶴が岡にて舞たりし時着せりといふ衣を藏せり。これも、靜の墓を訪ふと共に、往いて看るべきものなり。以上の墓は皆都の東北に當れり。さてまた西南に向へど、鎌倉、江の島などに遊べる人は、藤澤寺なる照手姫の墓を訪ふもの多かるべし。藤澤寺は藤澤驛(今は町)の端にあり。藤澤停車塲より七八町の路程なり。都よりゆくも、三時間とは、かゝらざるべし。近くは、また、目黒村の不動より七八町も北に當れる

古寺に、有名なる忠婦、淺岡の墓あり。日本橋よりは三里ばかりの路程なり。淺岡の墓は、東京と仙臺とにあり。仙臺の墓には、墓碑に三澤初子としるせり。仙臺の東端、榴岡の下、宮城野に近き處にあり。東京目黒なるは、淺岡と題せり。さてまた、女塚村には少將の塚あり。以上說き來りたる、眞間の手兒奈、橋姫、靜、淺岡などの事は、既に女鑑の史談に出でたれば、こゝには、少將の事について、記する所あらむとす。

女塚村は、池上村と蒲田村との間にあり。日本橋よりは、三里あまりの路程なり。大森停車場よりは半里にして近かるべし。少將の塚は、やがて、女塚村にあるなり。されど、里人、少將の塚とは云はず、唯、女塚と稱へ來れり。女塚のある處故、其處の村も、遂に女塚村と呼ばるゝに至りしなり。其塚、今もなほあれど、一堆の土饅頭に過ぎず。訪ひ來る人なければ、香花を捧ぐる人もなし。里人また女塚は誰を葬りたるものなるやをだに知らず、烈女の名、空しく埋れて、其鬼長く餒う。あはれ、比翼塚に小紫を弔ふ者多く、小石川の古寺に阿七の墓を訪ふ者すら多きに、薄命にして、夫の爲に死したる貞烈の美人の墓、空しく荒蕪に付して、顧るものなき

は、いたましき事の限りならずや。

少將は、夫の爲に其身を殺したる薄命の美人なり。少將の事を說くに先ちて、新田義興公の事を說かざるべからざれども、右に烈女墳墓のしるべの如きものを、長々しくものしたれば、義興公の事はごく短くしるすべし。

義興公は其父の志を繼ぎて勤王の軍を起し、一たび敗られて越後におはしゝが、また武藏國に來り、兵をつのりて鎌倉なる足利氏を計り給へり。足利方にては、其敵し難きを知り、謀を以て之を殺さむとて、竹澤右京亮といふ人にその謀をさづけて、義興公の方につかはせり。右京亮はもと義興公の臣下なりしが、凡夫のあさましさ、重き賞に眼くらみて、其舊主を殺さむと決心しけるなり。

さて、竹澤は義興公の許にいたり、前の罪を謝し、ふたたび又足利氏より追ひ出されて、身を容るゝに處なき故、憐みて用られむことを請ひ、言葉を巧にして申しのべけるに、義興公も初は疑ひ給ひしが、もと大度の英雄におはして、且つ、もとの臣下の事なれば、さまでは尤め給はざりけり。竹澤は益義興公の歡心を得むとて、京都なる宮の御所より十六七なる上臈を迎へて、義興公にたてまつりけり。これやが

て少將なり。花の顏、月の眉、類稀なる美人なるに、心さへいとすぐれたれど、義興公は愛でさせたまふこと一方ならず。しかして、少將を奉りたるものは、竹澤なれバ、少將の愛、自から竹澤に移りて、竹澤をバ又なき者におぼしめされ、他の舊臣にまさりて、厚く用ゐ給へり。こゝにいたりて、竹澤の謀は半成りけるなり。かく隱謀を抱くものとは、義興公さらに心づき給はず、少將もつゆ知らざりけり。九月十三夜の月は昔より人の賞觀する所なるが、一天晴れわたりて、月もさめて好からむと見えたる夕方、竹澤は明月の宴を張りて、義興公を迎へ奉り、隙をうかゞひて殺害せむとて、兼て巧める事なれど、一族若黨三百人催し集めて、其館の側に隱し置き、さて、竹澤は義興公の前に至り、草深き賤が家に何はなくとも、空なる明月を肴に、御酒一つ奉らむ。餘興を添へまつらむとて、白拍子も數多招き寄せて候へバ、今宵は枉げて入らさせたまへと、申しければ、そは興あることなり。いざ出立せむとて、馬に鞍おかせなどしけるに、少將より消息の文まゐりぬ。其文に、過にし夜、あしき夢見侍りければ、夢說を問ひはべるに、御身の上に危き事あり、七日がほどは、門より外に御出あるべからずと申しぬ。心せさせたまへ、とありければ、

義興公、井彈正を召して、如何すべきと問はせたまふに、危き事ありと云へど、御愼なくては叶ふべからず。今夜の御遊は止めらるゝこそ然るべけれと申す。義興公されバと思ひたまひて、風邪の心地にかこつけて、竹澤をバ還されけり。少將は竹澤の企を聞き知りければ、夢に托して、義興公のいでましをとゞめまゐらせけるとかや。

竹澤、事の案に相違したるは、偏に少將が消息文を奉りたるが爲めなり。これ生かし置きては、更に如何なる事をもらすやも、はかり難ければ、すみやかに殺害して、恨を晴さむとて、その夜、月のいと明かなるに、家の者四人五人して遠くつれゆきて、差殺さしめぬ。家の者ども屍骸を其まゝ捨置きて、歸りけるを、里人あはれみて、塚に收めけり。今の女塚、即ち是なり。

少將は身をころすまでに心を碎きたれど、義興公の御運つたなく、遂に竹澤の姦計にかゝりて、あはれや、矢口の渡に一片の水泡と消えたまへり。今、矢口村に其祠あり、其墳もありて、女塚と相離るゝこと二十町ばかりなり。此わたりには、大森八景園と云ひ、蒲田梅林と云ひ、原村の立春梅と云ひ、小向井の梅園と云ひ、梅林頗

る多く、月明にして林下美人來り、雪滿ちて山中高士臥すの趣も啻ならず。東風二月、淸香天に滿ち、白雲地を封す。佳人の香骨化して此花となれる乎、英雄の忠魂化して此香となれる乎。嗚呼忠臣烈女共に空しく一姦賊の手にかゝりて空しくなりたれど、其苦節孤忠は、歷史にのこりて、千歲の下にかをれるなり。

周防內侍

櫻橋芳子

右近之助といひし女房ありしが、內裏に仕へ奉りて周防の國司と契り、一人の娘を產めり。此の娘生長に從ひ容貌美麗にて、心ざしうるはしく、世に周防の內侍といへり、詩歌の道に委しく孝心にして、神々を敬ひ尊びけり、此の娘二十歲の夏とかや、母の右近病を得て漸々重り、人に面を向くべき病にもあらず、里に出て良醫を求め療治すれどもしるしなく、大內の御歌合などの折ふしには、此の人ならでは事ならず、おぼしめし女御の御方よりは御消息たびたびなれどもかなはず、月日もかさなりゆけども、快き方もあらねば、大和國初瀨寺の觀音こそ、かゝるやまひを治したまふなれと聞傳へ、初瀨にまうで七日籠りけれども、其の驗なく歎きおはしける中

に、淨土の巫女とて卜占の上手ありしが、是れに問ひけるに、貴船の祉へ、七夜丑の時にまうでするならば、奇特あらんといひしによりて、是れ偏に觀音の御告ならんと大に悦び、母の代參に内侍は只ひとり、遙の山路をいとものすごき丑の時に貴船の祉へまうで、深く祈念をなし、南無や貴船大明神願くは無邊の慈悲を垂れたまひ、母の病を癒してたびたまへと、丹精を凝し、伏拜み、ほどなくまんずる夜、靈驗あらたの神告を被り、内侍は深く喜びいさみて我が家に歸り、如意輪觀音を作り像を請じて祈しかば、母の癩病頓に愈え元の如く内侍に仕へ奉ることゝはなりぬ、其の觀音は今淸水寺の奥の院に安置し奉り、當代まで三ッの病を受る人、此の觀音を祈るに、かならずいやしたまふとなむ。

周防内侍の名は誰も知れり、なれども歌人として知れるが多く、孝行とて知れるは少なり、夫れ孝は百行の本、萬事の礎たることいふまでもなし、尤も女子の要は和に在りて、和の一字一に孝に依ること殆んど亦贅を復たず、されば心あらん世の諸嬢は、常に志を孝に存し、而後才輝き藻香しく周防内侍の如くならんことを、念々期したまふことを勸要なり。

漫録

詞のしるべ（二）

玉のや主人

一「たまはる」といふは、「たまものをうく」とか、或は「たまもの丶をいたゞく」といふ意味なり。故、に、必、下ざまよりいふ詞なり。例へど、伊勢物語に、「昔男後涼殿の間をわたりけれど、あるやんごとなき人の、御局より「忘草を忍草とやいふとて、さし出させ給へりけれど、たまはりて、わすれ草おふる野邊とは見るらめど、こはしのぶなり後もたのまむ」といふあり。能く味ふべし。又「たまふ」といふは、「物をあたふ」とか、或「ものをさづくる」とかいふ意にて、故に、必、上ざまより、下ざまにあたふるに用う。例へバ、伊勢物語に、「惟喬親王、例の狩りしにおはします、御供に、うまのかみなる翁仕う奉れり。日頃へて、宮に歸り給ひけり。御おくりして、疾くいなむと思ふに、大御酒給ひ、祿給はむとて、遣さゞりけり。」と、いふあり。能く味ふべし。こゝを、「大御酒たまはり、祿たまはらむとて」といひては惡しきなり。又、他人の所業などを、敬うて語らむとおもふ時につかふ「たまふ」といふ語あり。例へバ、伊勢物語に、「昔男ありけり。身はいやしながら、母なむ內親王なりける。その母、長岡といふ所に住み給ひけり」又萬葉集五の卷に「萬代にいましたまひて天

下ましたまはねみかどさらず」などいふたまふの類なり。これは、數多の文に見る詞なり。又それとはやゝ變りて、自身の所業などを、人に物語るなどにつけて、人に敬意をあらはす「たまふ」といふ語あり。源氏物語の宇治の卷などに、數多見ゆ。空穗物語にも「まことそらごと見たまへむとてまうで來つるなり」などいふあり。

一「刀自」といふ語は、もとは、美人といふ意にて、人の容姿をほめて、いひたりけるを、後には、唯、女人を尊敬する敬語となりて、家事を治むる婦人などを、しか呼ぶやうなれり。

一「濱」といふは、小石のごろ／＼したるをいひ、その澤山あるをば濱べといふなり。故に、河にも濱べあり。例へば、萬葉集二十の卷に、下野の國足利郡の上丁大舍人部禰麿が、防人に出立てる時の歌に「白浪のよする濱邊に別れなばいともすべなみやたび袖ふる」といふあり。此の濱邊は、やがて河原の事なり。又「磯邊」といふは、岩のある海邊をいふなり。「なぎさ」といふは「なぎ磯」といふ意にて、波の靜かなる磯をいひ、「ありそ」といふは「あら磯」といふ事にて、波あらき磯邊をいふなり、

一「人間」といふは、もと、人世といふ意味なり。人間萬事塞翁馬などいふを見るべし。さるを、今の人は、唯、人類といふ意味に遣ひたるが多かれど、それは誤謬れるなり。

一「忘貝」といふ語、よく古歌などに見ゆるが、それは、今東京にて、蛤仔貝と稱するものなり。

萬葉集一の巻にも、大伴の三津の濱なる忘れ貝家なる妹を忘れで思へや」といふ歌あり。其外數多あり。又馬鹿貝などをも、しか呼べるなり。

一「もの丶ふ」といふ語、いまは、武士のみをいふやうなれ丶ど、古は、さは限らざりしものなり。家々の職業もて、天子に仕へ奉る者、即、朝廷の官人共を、總じて「もの丶ふ」とはよびたるなり。されど、萬葉集の二十の巻なる大伴の家持卿か歌に、

秋の野にいまこそゆかめもの丶ふの
をとこをみなの花にほひ見に

といふあり。此の「もの丶ふ」を、武士のみと取りては、「もの丶ふのをみな」といふこと、更に解し難し。されど、官人を總て「もの丶ふ」といひたる由を知りなば、容易く意味を解き得む。武士も、此の「もの丶ふ」の中の一部分なれど、武士のみが、「もの丶ふ」には無かりけるを、いつしか、弓矢の技もて、仕ふるもの丶みを、しかいふやうなれるなり。筆の次手なれば、記さむが、此の歌に「花にほひ」といへるは、大宮に仕ふる男女どもが、立派に華美に着飾りたるさまを形容したるなり。「にほひ」といふ語、今は鼻に感ずるものをいへど、古は然らず。目に感ずる光りのつやをいへるなり。されば、今も「月がにほふ」「にほふ少女」などいふをみて、知るべし。

一 天皇にもの申し上げ奉らむには、奏すといふなる事は、誰れも知りつらむ。皇后、あるは東宮などに申さむには啓すといふべきなり。枕草紙に、

「御前にまゐりてありつるやう啓すれば」、「申つる事をさなむとまねびけいして」などあるは、皆清少納言が、皇后定子へ、ものきこえまつるにいへるなり。空穂物語、樓上の卷にも「左の大臣四人は、此の家に侍るわらはなりと啓したまへ」など見ゆ。

一　だに、さへ、すらといふ三種の、てにをはの區別を、明かに知らぬ人多かれば、その大畧ないはむ。「だに」といふは、「…………も」、「……………なりとも」、「…………すら」の三意あり。順序に其の例をあぐれば、古今集に「聲たえずなけや鶯一歳にふたゝびとだに來べき春かは」とある「だに」は、「…………も」といふ意なり。又同集に「散ぬとも香をだにのこせ梅の花こひしきときの思ひ出にせむ」とある「だに」は「なりとも」の意なり。又源氏物語帚木の卷に、「はかなきことだにかくこそはべれ」とあるごときは、「すら」といふ意なり。「さへ」といふは、「あるが上にも又」といふ意なり。古今集に「梓弓おして春雨けふふりぬあすさへふらば若菜つみてむ」、又「春雨よにはへる色もあかなくに香さへなつかし山吹のはな」とあるを味ひてよ。又、「すら」といふは、劣れる物で「さへ」といふ意をふくめるなり。鎌倉右大臣の家集に「ものいはぬ四方のけだものすらだにもあはれなるかな親の子を思ふ」、又凡河内躬恒の家集に、「鬼すらも都の中を簑笠をぬぎてや今宵人に見ゆらむ」など、よく取りいでゝ見られよ。自、區別は明ならむ。

櫛のあか

故人備中　木下幸文

左の歌論は、香川景樹翁の門人、木下幸文ぬしの筆なり。文政の初、一度、刻本となりたれど、今は、其本も乏しけれど、まだ見たまはぬ媛たちの爲にとて、殊更に寫出侍りぬ。

松浦萩坪

此頃鈴屋翁の玉小櫛（源氏物語注）をよむに、初の二卷は、彼物語の大旨にて、古來先達ひたぶる儒佛の意に、引曲られたるが、僻事なるよし、いと詳らかに論ひて、扨大かたの物語といふもの丶ふり、物語見る心ばへのやう、將此作主の此物語かける主意など、やがて此一部のうちの詞どもを證として、さし櫛のわかぬ所なく說わけられたる、いとめでたく貴く、心ゆく書になん、かくて此物語のめでたき事を、かへすがへすいはれたるが餘り、歌よむ心ばへのさだに及べる一條あり、是に至りては、其論あやしと覺ゆる事少なからず、此翁の歌のよみ口、古調近調など、體をわけて、物せらる丶事など、はやくより心も得ず覺えしを、今此條の論ひを見れば、素よりさるべき心ばへなりけり、故今ことごとく本文をあげて、聊、其小櫛の垢と覺ゆるくまぐまを、書出んとす、猶、我論ひの垢をば、人よく洗ひ給ひねかし。

宣長云、歌よむ心ばへを知らんとならば、此物語を常によく見べし、此物語に書たる事々も、人々のしわざ、心ばへは、ことごとく歌よむ心ばへなり。

幸文云、先此主の意を一わたり說き、さて我思ふ所をいふべし、こゝの意、雅情俗情といふ事を、二つにたてゝ、歌よむべき心ばへといへるは、雅情をいへるなり、さて歌よまんとすれども、今日の人の心は俗情なれば、先其雅情を知るべし、其雅情をしらんとならバ、此源氏物語を、常によく見よとなり、さるは此物語一部のうへの人々のしわざは、ことごとく風流の事、思ふ心ばへは、ことごとく雅情にて、則、今ならひて、歌よむべき所の心なり、といへるなり、先歌よむ心ばへの事は、さまざまの事にふれて、聊、いへるが如く、世中のとあり、かくあり、喜び悲み、往かふうへ、又月雪花の折ふしなど、すべて何にまれ、事にわたりて、あなあはれと覺ゆるふし〴〵は、皆、歌となるの心にして、やがて雅情なり、此心、則、人情の常にして、古今たゞひとつなり、さるは移りゆく時代に從ひて、今の人の情は、古人の情の、厚く雅かなるが如くならざる事はあれども、猶、喜びは喜び、悲みは悲しみ、花は花、月は月、大かた其情かはる事なし、されば、ひたぶるこれをおきて、いにしへに求め、人に求むべきにはあらず、先、彼物につきて、あはれと覺ゆるみづからの情を、よく知りあきらめて、さて、古の雅をも、何をもいはんぞ、學びの本末なりける。

(宣)しかいふ故は、いかにと云に、先人の情は、古今高き卑き、かはる事なき物とはいへども、其中に時代のならひ、身の程などおのれおのれが世

中につきて、いさゝか、かはる所もなきにあらず。
(辛)時代のならひ、身のほどにつけて、聊づゝかはる所ある、おのづから人情然るべき理りにして、此變、又古今同じき所也、さて其時代、其身のほどにつけて、いひ出る歌なるが故に、其時代のさま、其身のほどあらはるゝぞ、歌の誠なりける、こゝは次、下に歌よむ心ばへ、上つ世と今とは、たがふ事をいはんとて、先いへる文なり。
(宣)かくて、歌も情の物に感ずるより、よみ出るわざなれば、古今高きみじかき、かはりは、有まじき事わりながらも、上つ世こそあれ、中昔よりこなたの歌はしも、必今思ふ心をのみ、有のまゝによみ出るにもあらず、古の歌を學びて、其趣によむわざなれば、古の世の有さま、人の心ばへ、しわざを、よくしらでは、叶はぬわざなり。
(辛)上にもいへる如く、歌は心に思ふ事をいひて、其心をやるわざにこそあれ、中昔よりこなたの歌に、今思ふ心をよまず、古の歌をまねびて、其趣によむわざとなれるは、早く一つの作物となりて、やがて、歌といふものゝ旨は、失はれたるなれば、其もと然るべからぬ事を喩して、古の人の誠の歌よみし心ばへをこそ、敎ふべき事なるを、其旨を失ひたる、世のわざをしも、よき事として、其まねびやうをさへ、かく懇に示されたるは、いかにぞや。
(宣)又古をまねぶと云中にも、萬葉集よりあなたのは、世わかり事遠くして、其さま甚くふりに

たれど、指置て、大方古今集より此方を、まねぶ事なるに、其世々の歌どもは、皆、むげに賤き、賤山がつのよめるにはあらず、されば、古の歌をまねぶにつきては、中の品より上ざまの人の心しわざ、其品の世中をもしらでは、叶はぬわざなるを、今の世にして、それ細かにしらん爲には、此物語を見るにまさる物なし。

(宰)此論又いぶかし、すべて翁の論、歌は全くの作りものになして、只不用の翫物としたる方の論ひなれば、歌といふもの丶本の心もては、論ひがたし、されば、今姑く題よみなどの歌學びの方に、心を置て云んにも、猶、いと心得難き論ひどもなり、先古今集をよしとして、まねばんとならば、彼集の歌の眞心より出て、姿、詞、おのづからのどかに、めでたきを常に吟じ味ひて、いかで、今よみ出ん歌も、かやうに、あらまほしと、常に願ひたらんには、しらず／＼、彼眞心のしらべに移りて、いやしく迫れる姿を、離れたらんぞ、古今集をまねぶには有べき、さるを彼集わたりの歌どもは、むげに賤山がつの歌ならねど、其世の歌をまねぶにつきては、中の品より上ざまの人の心しわざを、しるべき事也、といはれたるいと／＼怪し、いかに今の世の歌は、作り物ならんからに、山がつにして、狩衣姿したらん、人の口つきなる事をいひ、賤の女にして、すべしもとゞりならん、女房の歌めきたる事いひ出ば、淺ましきわざそきならずや。

(宣)古のも、只歌を見たるのみにては、其歌の出

來つるもとの心の委しきやうを、しらざる故に、まねぶに猶疎き方あるを、此物語を、明暮によみなれぬれど源氏君を初めて、よき事のかぎりを、取集めて、みやびたる人々に交らひて、そのあたり、其けはひ形を見、其物語を聞くが如くにて、其しわざになれ、其心のうちまで、細かにしられ、又そのかみの雲の上の有樣、をり〳〵の公事、やんごとなき家々の、うち〳〵の事どもまで、雅たる事の限を、今のうつゝの目の前に見るが如くなれば、古人の歌の出來たる本の有樣、心のよくしられて、かやうの歌は、しか〳〵の時に出きて、其折のよみ人の心は、しか〳〵なるものぞやうに、委しくしらるゝわざぞかし、さる故に、此物語に書たる事ども、人々のしわざ心ばへは、こと〴〵く

歌よむべき心ばへぞとはいふなり。

（辛）上件の旨を、二重三重いと細かに、ことわれるなり、古の歌を見んに、古のさまを委しく知らでは、其歌の心の細かなるやうを、知り難き事、此論の如し、されど、今よみ出る歌の心ばへを、古にまねばんが爲の學びにするは、事たがへり。

（宣）さて今の歌は、古のをまねびて、よむと云由を、猶、委しくいはゞ、先、歌といふもの其本をいはんには、おのが心に思ふふしをこそ、よみ出べきわざなれ、人のよめる意詞を、ならひまねぶべきにはあらざれども、そは上つ代こそあれ、中昔よりは、しかのみにもあらず、又すべて歌は、神にも人にも、きかしめて、あはれをみするわざ

にしあれバ、よくよまんとかまふるも、素よりの眞心にして、後の僞にはあらざるを、よき歌をよまんとするには、必、古のよきうたをならひまねむでは、ゑあらず。

(幸)これらの論に至りては、怪しくも、片腹痛くも、悲くも、いきどほろしくも、八尺の歎き打せられて、とる筆さへ、去バし指おかれぬ、おのれ、此翁のをしへ子ならねど、翁の著されたる書ども、何くれよみて、やゝと魂のふとくたくましく、萬の學び博く厚らかにして、其かたに勉められたる事どもの、いとまめに、切なる、貴くかしこく、涙落ゐバかり感ゐる事常也、さて今日の、おのれが學びを、翁の上にたとへたらんよ、九牛が一毛などは、猶まだ去かるべし、さるちごの口に、かゝる論ひせんをバ、いかに嗚呼なりとか、人も憎むらん、されど、更に更に、事好みて云にあらず、此度ならで、既く此歌の論ひの所、見たりしは、聊か、心ゆかず覺えし事どものありしは、いかにぞとて、すこし心留めて、よみ渡したるよ、いとあやしきふしぶし多かるを、猶あるやうもぞあるとて、二たび三たびと、よみ重ぬるに、此歌といふものを、心得られたるやうは、いと異やうなるものに、思ひなしつ、扨、つらつら思ふに、只、大方の初學を、なしふるやうこそは、其敎ふる人の心にて、さまざまにたつる趣も、有事なれど、これはいとあやしく、やがてみづから、此筋におきては、取ひがめられたるものにて、こゝの論

ひは、大旨源氏の世に勝れて、貴きをほめたゝへん事のついでの一件なれど、素より翁の云れたる事をも、只の一言をも、人大方に見るべきならねバ、これを見て、歌といふもの、旨を、かゝる事と心得たらんには、いと恐ろしき天が下のまが事と覺ゆれど、今日の我聊こゝろえをる筋につきて、其僻事と思ふ由を、姑く論ひ出づるなり、こは翁世にいまさバ、疑ひ得つめて、猶、其定めをも、聞まほしき計の心也、更に〳〵、物争ひの心には、あらずなん、先この件、すべて歌は神にも人にも、きかしめて、あはれをみするわざにしあれバ、云々とある、甚いかゞなり、歌は人の眞心の限を打出るにつけて、神も人もあはれと、聞ものにこそあれ、是より搆へて、あはれを見するわざにはあらず、いにしへ雨を降らせ、雨をやめたるなど、民の歎き、世の歎きを、深く思ひしめたる眞心より動かせるなり、男女の中を和らげ、武士の心を慰むるたぐひ、只此眞心一筋の外なし、かくいはゞ惡くきかん人は、古今集に、鬼神をもあはれと思はせなど云るは、猶これより思はするならずやなど云べし、かれは歌の功の成とげたる跡を論ずる論者の言葉にこそあれ、いかで其歌よまん時、しか搆へてはよむべき、たとひあはれと思はせんとて、よむともしか穢なき志ならんには、神も人も、いかで感ずる事のあらん、これらは云も餘りに、淺はかなる譬ながら、先歌といふ名を忘れて、今日のうへになりても

思ふべし、こゝに主人に仕ふる人あり、其の人主を世に大切なりと、思ふ志の實だに、ねもごろならんには、主の心おのづから感じて、其恩かうふりつべし、もし其人さる實心はなくて、たゞ主の恩を蒙らんが爲に、言好きかぎり、見えよき限りの振舞したらんに、淺ましく目ひがみたる主こそ、はかられもせめ、すこし物の心あらんはさならで、憎みて逐やりつべし、されば、主人に仕へて恩を蒙らんとならで、さる僞の巧心をやめて、たゞ主を大切なるものと心得て、眞心の限をだに仕へんには、其人いささか無骨なる事ありとも、主ゆるして、はてはど恩み加へつべし、されど、たとひ詞つたなく、姿足はぬ方ありとも、眞心の歌ならんには、う

はべよき僞歌にはまさりて、鬼神もあはれと思ひつべし、さてよくよまんと構ふるも、素よりの眞心にして、後の僞にはあらざるを云々、例の歌の本をもていふ時は、歌は其時の思ふ心をいひて、其心をはるけやる爲のものなれど、殊更によき歌よまんとかまふる事は、なき事なれど、上にもいふ如く、さる心ばへをさおきての論なれば、例の題詠などの意もて論せんに、げによくよまんとはする事なれど、それにとりて、心ばへたがふべし、先題は、今、まのあたり思ふことをいふにあらねど、それも月に花に、其題を得たらんには、其月に花に、向ひたりし時の情になりかへりて、おのづから感せらるゝ其心の限をいふべし、然かる時は、今めの前の事

に感じて、いはるゝが如くはあらねど、猶其實の外ならざるなり、これを譬へていはゞ、今打つけに事に感じていはるゝ歌は、腫物の時來たりて、おのづから膿のあふるゝなり、題よみは、これに膏藥といふものはりて、其膿をよぶに似たり、おのづから溢れたるが愉快きが如くはあらねど、猶其膿をさるることは、二つならざるなり、されど、題詠とても、いかで其誠をいはんと構ふるなん、則、よくよまんとするにはありける、翁の意は然らざる事、あはせ見て思ふべし、扨よくよみてはめられんとするは、けふの俗情の常にして、彼つかへ人の、主の恩を蒙らんことを、願へるが如く、まことよき心にはあらざらめど、げに僞にはあらず、されどゆるして、其俗情のねがひを、遂しめんとならば、いかでまことの歌をよみて、鬼神の心には叶はん事をこそ敎ふべきに、其眞心をおきて僞歌よまんかまへをしも、示されたる、かのつかへ人に巧言令色を敎ふるが如し。

胡てふの日記

阿部優子

こは、羽前の鶴岡の人、白井千代梅ぬしのしるしゝふみなり。なき人をしぬぶとて、このふみにかゝげんとずなり。

いでや、うつせみの世の人ごとに、おのがしゝたのしとするわざ、とりどりにあらめど、海山のながめばかり、こゝろゆくものはあらじかし。され

ど、白雲へだゝる、とはきわたりは、旅衣、おもひたつべき身にしあらねど、只、家國津君のしろしめす、境の内なる名所をだに、見てしがなど、としごろおもひわたるを、早田氏の母とじ、はらからなる何がしは、吹浦の關もりなるを、しるべ人にして、かしこのわたり、おちなく見めぐりてんと、おもひたちぬ、そこにはいかでと、せちにそゝのかしたまふにぞ、うちすの鳥のとびたちぬべき、こゝちすれど、母君は、人の物いひさがなき世に、さるかろ／＼しきわざは、いかでかはと、ゆるし給はねば、實にことわりとはおもふものから、さすがにはいなくて、こゝちさへわづらはしうおぼゆれば、打ふしつゝおもふに思ひたへで、玉かづらかゝるをりならでは、いつかはと、わながちにこひもうせば、さらぞ、かの刀自の子うまごぜもなりてよと、のたもふにぞ、いみじう嬉し。

かくて、水無月の末の五日、袖のうちまでは、舟路をゆかんとて、巳の時ちかきに舟にのりぬ、やゝこぎいづるほど、川もいとひろらになりて、遠近の山は、雲のへだてもなふ見渡され、日はたかうなりつるものから、汀のあしにおとづれわたる風のふねにも吹いれて、夏もわするゝこゝちす。

川せにはまだきに秋やたちぬ覽
とまふきいるゝかせのすゞしさ

水草の花清げにさけるは、をりもとらまほしけれ、あさ瀬になれぞ、舟子はをりたちて、綱手くるしきに、ひく所もあり、汀に柳芽などむつかしげにおひしげりて、空も見えず、いといぶせき中をて

きわけつゝゆくに、こゝちもなやましうなりぬ、刀自は、よへものしたゝむるなどにて、いとうぶかしつるにとてふし給へば、おのれもより添でふす、こゝよりなん、もがみ川になりぬといふにぞ、かしらもたげぬ、いさりいでゝやをら見出すに、水のいろさあをにて、右のかたには木立もなく、たかゝらぬ砂山などあるぞ、たゞ海原にてきいでたらんやうにて、すくせの山の高根に横雲の棚引きたるさま、田子の浦わもかくやあらんなど、いひしらへど、黒森坂のへなどのわたりこそ、こゝにをかしきながめなりしをなど、夢にのみ過ぎけんといふ心を、唐歌につくりて伏かたぬしの笑ふにぞ、たのしさはねぬにまさりのなみまくらもろこしかけて夢に見つるをと刀自のいらへたまへぞ、われも、

波枕むすべる夢の楽しさは
　ねぬにまさると人はしらずや

とじは、またをさなき人なれど、かゞやかしうもあらで、かゝることをも、きこえかはしつ、はるばると、ゆはひかなる水の面に夕日かゞやきたるは、こがねの波よするかと見ゆ、ふねよる袖のうらのみなども、あかくなりて、日和山なる五重の塔も、それかあらぬか、いとちひさく見ゆるも、をかし。

心あらむ梶なはやめそ夕映の
　あかぬ詠もふねながら見ん

とおもへど、ほどなくさりて、出町なる何某の家にやどりぬ、いて、日和山はいとちかし、暮れぬ

間にとて、たちいつれど山にのぼれど、いとくらうなりて、さだかにも見渡されず、月夜ならましかばと、人にもいふ星の影かとおもふまで、かすかに火ふたつみつ、沖邊にみゆるは、海士のいさり火にやあらん、湊の船にも、みな、火ともしたり、こゝもとに見おろさるゝは、船場町とか樓ごとに、花燈籠かけわたし、人あまた酒くみかはしてあそぶ、をとこ女のけちめはみえねど、扇など持ちてたちまふさま、めなれずをかし、風いとすゞしう吹て、草村にきはへる虫の音など、はたあはれなり、ふもとの方にきぬたのおときこえければ、

　　ふきかへす袖のうら風身にしめど
　　　　秋をもまたで衣うつらん

やがて、歸りぬ軒ちかき松の梢に、かぜさや〳〵とふきわたるを、旅宿の秋風といふこゝろをよめと、刀自ののたまふにぞ、

　　夕さればいとゞわびしなゆひそめし
　　　　草の枕にかよう秋風

花ふゞき

その十四

塩井雨江

悲風ふきすさび、愁雨かきらして、ぬバ玉の闇夜なせる浮世の海原に、こなたも埋もれ、行方も隔てられ、たよりを知らに、たゞよひながらも、なほ、櫻姫賤機が、おぼつかなき心の中に、かすかなる一點の星光の消えず、遠く半影の沙岸離れず、望みくらし、思ひつくし、賴みわたりたる一の宮の御坐所、土佐の畑浦。一心空しからず、辛うじて、そがわりそに、玉の緒と共に舟を繋きとめたる主從のうれしさ。賤機は、七郎を三郎が館へ遣はして、獨り岩根にうちのぼれバ、さながら、天のやす河原に下り立ちて、現ながら、白玉眞玉拾ふなる神女にもなれる心地して、此の世、彼の世、わが世の中の、あらむ限りの望は足れりとばかり思はれて、われながら、心の波のいさみ立つを覺えざりけるを。七郎が歸るをきけば、賴みも情も、今更に水泡の、うたて賴まれず、情なき三郎なりと見ゆるに、はえなく湧きかへる心の怒濤、猛り立ちては靜まらず。よしや巖を疊めるとも、碎き盡くして、宮を救ひ出し奉らでやはと、露をも厭ふ撫子の女子ながら、水火に屈せぬ忠婦の鐵腸、射てはかへらぬ矢竹心の一節に、有井の館を志ざしたる賤機、けふ七郎が瀏につけのぼりたりといふ裏手の崖とおぼゆるわたりより忍びより、岩はを二ッ三ッ、勢にまが

して踊り上り、おぼろなる月の光りに見わぐれバ、さながら、屏風を立て連らねたる大岩、幾丈かわらむ、かぎりも見えず。さはいへ、何かためらはむ。下なる衣の袖ひきさきて、足先を結びて、打ちのぼらむと爲すに、更に手を賴むべき草もなく、足をよするべき角もわらねバ、幾度かすがりつきて、のぼらむとすれど、二足もえのぼらず。心頻りにいらだてど、亦如何ともせむすべ無く、歯喰みをして、うちあむずれど、嘲けるが如き岩ののげ、囃すに似たる浪の音、いかなれバ、かくまでに、わが身につらかる天地かと思ふにつけて、心はいよ／＼猛り立ちてやまず。七郎とて、翅は無かりけり。渠が越えたりといふを、わが身にえせぬ事のあるべき。所や違ひたらむと、岩ほを、又二ッ三ッ、一飛びに飛び下り、磯を一二町めぐれど、おなし列に並びたる岩の、稍折れ込みて、屏風の角めきたるさまなせる所あり。臆機は、その角立ちたる淵に諸手をかけ、身體は横さまに輕く岩のかたはをふまへ、總身の力を、唯、左右の腕にわつめ、屏風の角を、手もてよぢのぼり／＼、辛うじて數十丈行けバ、岩は、やゝくぼみて、纔かにきびすを入るゝをかりなる一條の段をなせり。それより、又もや、上は絶えたれど、もとのやう嶮バしからず。やゝ斜を





なせれバ、匍匐して、一丈ばかり打ち上るに、こはいかに。頂ははや程近けれど、又もや、屏風のやう立てるに、すがるべき蔓も、支ふべき草もあらぬを、いかにせむ。いかにせバやと、途方に暮れて見わぐれバ、程ちかき頂きより、横さまにはびこりたる松の大木のしづ枝、崖の半バまでうち垂れたるあり。賤機は、決死の覺期すさまじく、岩はをしたゞかに、蹴りつけて、身を踊らすと見れど、宙を二三間、飛鳥の如く飛びあがり、危く松か枝にすがりつけど、しづ枝は細し、こらへずや、さつとたわめる隙もあらせず、賤機は攀猿のごとく飛び轉る一刹那、どつと音して、しづ枝は折れたり。

枝より枝と、松にすがりて、やうやくに頂に、上り立てど、いつしか朧の月も傾きて、天地をつゝむ夜の雲、闇はあやなくなりゆきて、八鬼狂ふか浪の音、百魔叫ぶか松の風、そゞろ身の毛もいよだちて、すさまじきこと、いふばかりなし。

錦繡のやさしき賤機が心、常ならば、夢に見てだに、うちも震はれ、玉の緒のあへなく絶えなむばかりの、もの凄き夜半の景色、まのあたり見れど、非常の決心、一筋はいつかなひるまず。今はなか〳〵に、便りよしとや、完爾と打ち笑みて、屋形

の方を睨み詰めたる芙蓉の眦、天女の恚りもかくならむ。
隙もなく結びまはしたる柵を、三度越ゆれバ、庭とおぼしき方に出でたり。忍びやかに、木の間をくゞり、何處か宮の御坐所ならむと、闇夜にまかして、築山の裾、池の水際、奥深く忍び入れど、はしなく小やかなる屋形に出でたり。寢屋へは、わたどのにてうちつゞき、一層欄をたかく搆へたるなど、殊更に造りたる家のさまは、よしありげなり。
必定これならむとおもふに、腰機は、暫時、前栽のこなたに隱れ、人やあらむと、彼方を窺ふに、軒端の松の、をりふし荒き海風に驚きてか、枝を鳴らして、頻りに闇を戒むる響の、高くきこゆるのみ。よそには、絶えてもの音もあらねど、腰機は、忍びやかにさしより、耳をすませど、殿居もいねたるか、たへて人のけはひもせず。諸手をかけて、欄にのぼりて窺ふに、戸は、皆外ざまより、大やかなる錠もてかためたるは、いよ〳〵御坐所とおぼえたり。
二度三度ゆるがし見れど、戸は開くべきけしきなければ、又下り立ちて、崖にむかひたる欄に出づるに、此處にも、戸は、おなじさまに、鎖ざしたり。尋常にては入る

べうもあらず、賤機は、懐中なる短刀を取り出し、あはれ父上や、願ふは力を添へさせ給へと、一心に念じて、戸の間合に、さゝやかなる隙あるより、短刀の尖先うち込て、音をぬすみ、力をこめ、戸を穿つに、海風いよ〳〵松にさやぎ、恚濤ますます岩を砕けど、きゝ知る人もあらず。錠は、もろくも、えぐり取られぬ。

賤機は、思はず天地を仰ぎ、短刀を拜し、戸を引き迯して入るに、燈火も消え、人げもなく、何となう陰々たる氣の、身をつゝむやうおぼゆるに、胸は苦々しきまでにとゞろかれぬ。壁をたよりに、奥ふかく、幾足かすゝめは、一段高く、長押やうにかまへたる所あり。そを傳はりて下れば、廂の間とおぼしき所にて、細殿にや燈したるか、かすかに漏るゝ燈火の光りあるに、潛にそなたの襖を、やゝかひやりて、かなたの光りに、此方をうち見れば、長押とおぼしきは、五緒の御簾さへ、高くかけたるは、まさしく宮の御座所とおぼえたり。されど、あやしきは、御床も見えず、御香の薫る煙も、絶えてあらず。

さらでも、三郎を疑ひて、忍び入りたる賤機が心、宮おはさじと見るより、さてはと思へど、いかで怺へむ。おのれ、妬き三郎め。唯やはおくべきと、身を震ひて、は

やり立つ忠臣一圖。拔き放ちたる短刀を。右手に握りつめ、細殿の戸蹴開らきざま、寢殿さして狂ひ入る物音に、うち驚きて。殿居の武士の三人四人り、おのれ曲者と呼はりて、のゝじりさやぐを、賤機は近くも寄せず。あな輕我なせぞ。なれらに用なや、三郎を出せ。疾く出せと、なほも猛りに〳〵りて、奥を目懸けて、進まむとす。者共は、立ち塞り、追ひすがり、手どりにせよや、討取れやと、太刀振りかざして、ひしめけど、容るさじと、踊り上り〳〵、前後をはらひ、左右をつき、八方際なき尖先は電光石火、屋形も震ひ轟くや。

文林

雨後花　　毛利元德

春雨のなごりのつゆをいましむし
花にとゞめて見るよしもがな

東久世通禧

櫻をなにほひこそそへはるさめの
なごりの露に日かげさしつゝ

佐々木高行

のこりなく雨雲はれてあさ日さす

高ねのさくらいろぞにほへる
鍋島 直大

はるさめの晴れての後も色かはる
花のさまこそあはれなりけれ
前田 利嗣

春雨の晴れたるけさもおくつゆの
にほひこぼるゝ花のいろかな
松浦 詮

おほそらは緑にかへるはるさめの
名殘のくもは花にぞありける
福羽 美靜

勤

よき事をよそにまけじと勵むこそ
人の世にあるつとめなるらん
前田 利鬯

雨後花

さかりなる櫻がえだにちるものは
晴れにし雨のしづくなりけり
水野 忠敬

雨晴れて露まだのこるさくらばな
かへりて色のまさりけるかな
鈴木 重嶺

芳野山靜のかた

吉野山よしわかるともみちのくの
はてまであとを慕はざらめや
諏訪 忠元

舞子の濱にて

をとめ子の舞子の濱によるなみの
音おもしろくたつぞいふなり
宮地 嚴夫

雨後花

つれづれにふり續きたる雨はれて
長閑にはなを見るあしたかな

小出　粲

春雨はやみても晴れぬくもり日に
つゆもさやけき花のいろかな
坂　正臣

ちるらんと思ひし花はさかりにて
をりよく雨も晴れにけるかな
植松　有經

春雨はのどかに晴れてくれなゐの
夕日ににほふやまざくらかな
内藤　存守

音もなき風のそよぎにそら晴れて
花のうへよりあめぞこぼる
鎌田　正夫

ぬば玉の夜すがらふりし春さめも
花にさはらず晴れしけさかな

春祝　師岡　正胤

ちる花をおしむ聲のみさわがしく
四方にきこゆる御代の春かな

古郷春月　酒井　喜雄

軒はあれて月はおぼろに匂へども
春やいかにととふひともなし

巴御前　佐々　豐水

三越路やともまつ里のひめかゞみ
くもらぬ名こそよゝに高けれ

路邊柳　松本　道別

みちのべのひともと柳えだをしみ
やがてたちよる木蔭なるらむ

雨後花　鍋島　榮子

いかにぞとおもひしよりもやま櫻
花にさはらぬ夜半のあめかな　蜂須賀隨子

村さめの晴れての後ぞとはやまに
かゝれる花のくもは見えける　前田朗子

雨晴れしうへの丶岡に來て見れど
まださかりなる花もありけり　小池道子

春雨は晴れにけらしなおぼろ夜の
月こそにほへはなの木ずゑに　北島以登子

春雨のつゆものこれる花のうへを
さやかにてらす夕日かげかな　松平健子

たちよれた雨のなごりの露ばかり
ちりて嬉しきにはざくらかな　鳥尾廣子

雨晴れて白くなりたるさくらかな
つぼみ殘らず咲きそろひけん　鶴久子

雲はまだ雨けのこれるやまの端に
いよ〳〵白くみゆるはなかな

野遊　三輪田眞佐子

あづさゆみ春野の原にはなちたる
こゝろの駒はいつかつながん　阿部優子

北條時宗

筑紫がたふたゝび波の立たぬまで

くにのひかりを見せし君かな

深山花　師岡須賀子

杣人がつま木にそへて來るみれバ
深山ざくらやいまさかりなる

春海　園生鶴子

まは片帆ひらきの帆かげはの〳〵と
見しまに遠くかすみてめつゝ

卒業　東宮鐵眞呂

第一節

指折りかぞへ待ちし月日
いつしか過ぎて今日となりぬ
課定のわざは卒へにたれど
身に負ふ責任は重くなれり
いよ〳〵仰げ師のをしへ

第二節

年月長く通ひ來しも
思へば親のめぐみなりや
嬉しき今日の式にあひて
過ぎ來しほどをいとゞ思ふ
ます〳〵慕へ親のめぐみ

第三節

學びのまどに馴れし友よ
別るゝ時も今はなりぬ
をちこち遠くはなれ住むも
こゝろは共に長くあらん
忘れず思へもとのよしみ

文會につきて友の許へ

師岡須賀子

かねて聞えし文會、その連に入らむといふ人おほく、三十六人になり侍りぬ。さて、題は、何よけむと思ひわたしつるに、人數にあへる三十六人の歌仙と定め、探題して、人々に分ち配りはべりつるに、早、半にすぎてあつまれり。かゝる難き題なれど、今姫たち、深く考へ、よくしらべられたるほどしるく、文の體おもしろく、筆の跡うるはしくはべり。されど、おのがじゝ、自のを、よしと思ふば、つねの事にしあれど、人々の文を、左右にわかち、十八番の文合としたり。それが優劣を判ずる人をと、たれかれ、かたらひ侍るに、君こそは、同じ學の友とはいへ、年も才もまさりて、書おほく讀み、事廣くしりておはせど、判者とあふがむとさだめはべり。いかで、うけ引き給ひて、會席に出まして、文合の博士、松の屋大人となりたまひて、そのよさあしさを判じたまひてよ。おのれ、君と、ことに親しくはべれど、人々にかはりて、乞願ぎまつるになむ、萬は、對面たまはれる折にこそ。

雜報

●皇后陛下の御仁慈　さいつ頃、はろ〴〵と、廣島にいでまし、　皇后陛下には、それ〴〵、豫備病院をめぐらせたまひて、いたしく、傷けるますらを、病めるつはものを視そなはしては、くさぐさの物など下し賜はり、また、かしこき　大御言をさへ下させたまひて、これを慰めさせたまふより、いづれも、ふかく、あつき大御惠に咽びまつらぬはなしと承りまつるぞ、かしこきや。また、この程のことなりとか、看護婦どものよるひるのけぢめなく、看護に、心をつくすを、いたく賞でさせたまひ、なほ、おの〳〵、その職務の模様によりて、三週間に、一日の休暇を賜はるべき旨、御沙汰あらせられたり。されど、看護婦は、申すにおよばず、豫備病院にても、御思召のほどを、ふかく感戴しまつり、この月一日より、それ〴〵、休暇を定めたりとぞ。　陛下の、仁慈の徳に富ませたまふことは、今にはじめぬことながら、かばかり、萬に、大御心をそゝがせたまふは、いかに、かしこきことならずや。

●乃木少將の母堂及夫人の恤兵　步兵第一旅團長陸軍少將、乃木希典氏の母堂、及、夫人は、少將の出戰の留守中、生計を節約し、少將の部下なる、第一旅團の管轄區埼玉縣より出身せる陸海軍人の家族にて、貧困なるものを救助せんとて、第三回の賑恤金貳拾六圓を贈りて、分配方を、同縣知事に依賴せられたり。知事は速に了承して、その分配法を定めし、管内各郡長に配付したりきといふ。主人外に出で、國家の爲に大功を奏す。

その母堂、及、夫人、また、内にありて、夫の部下の家族を賑恤す。美事、これより盛なるはあらじ。（四月三日志るしたるなり）

●少女の眞心將軍の風流　北の海の函館元町遺愛學校の女生徒、小田桐勝子といふ少女は、豫てより家庭の教育よくて、優にやさしき子なりとの聞えよかりしが、つね〳〵我が軍人たちが、深く淸の荒野に入りて戰ふことの困難を思ひ、中にも第一軍が、殊に深く北に進みて、漢北の野に苦戰するよしを聞いて、いとはしさに堪へず。また、その將軍たる立見少將が、功績のすぐれて大きなるを慕ふあまり、心ばかりの物なりとも「何がな、慰問のしるしをなさばやとて、人知れず毛糸を求めて、學課のいとま〳〵に肉襦袢を編み、郵便にて、少將の許におくりたり。野山をあさる虎は物かは。鬼神をもおそれさすべき少將も、やさしき少女が志には、深く心に感ぜられたりけむ。一片の謝狀と、をかしき狂歌とを、勝子の許におくりこされたり。

いまだ御めもじもこれなきに御心にかけられ御手製の肉襦袢を惠み給はり御眞心のほどいかにとも申しやうなく嬉しくぞんじあげまゐらせ候まづは右おん禮までめでたくかしく

三月九日　鳳凰城　立見尙文

小田桐勝子様

このいくさきつと勝子とうけあへり
君がまことを身にまとひつゝ

少女の志よみすべく、少將の風流、いにしへの英

雄にもましておもしろし。まことに、日清戰爭の上に、一枝の花を添へたりともいひつべしかし。

●小學女生徒の訪問　日本橋區常盤小學校の女生徒百餘名は、さいつ頃、一日の暇をつひやして、東京陸軍豫備病院を訪問し、各病室にまはり、唱歌を謡ひて、患者を慰めたりといふ。やさしく殊勝なるふるまひ哉。患者たちも、また、嘸、嬉しく悦びしことなるべし。

●孝女賞金をうく　群馬縣にては、此のほど、孝養をつくしたりとの廉をもて、左に見えたる表彰文に、金圓をそへて、孝女中村けんを賞したりとぞ。

群馬縣上野國南勢多郡木瀬村　中村ケン

資性温良篤實幼より父母に事へて孝順文久元年中他に嫁し子なきを以て離別せられ其家に歸るや善く父母に奉事す家素より赤貧資財なく且つ父は明治十四年を以て死亡し母亦尋で重病に罹り起居自由ならずして家計は益貧困に迫るも未だ嘗て其志しを撓まず一身以て家事に當り出ては勞役に服し入ては力を奉養に盡し志操を渝へざること三十有餘年終始一日の如く洵に奇特とす仍て其賞として金二圓下賜す

●楢の舍主人　森馬太ぬしは、去年、從軍せられて、當時は、清國海城に居らるゝよしなるが、相變はらず、壯健におはせりとぞ。こたび、歌二首をおくりこされたれど、やがて、左に、

鳴くからにのどけくあれば群鳥の
こゑのうちより春や立つらん

いやが上にふりつもれりし唐土の
　太野のはらのゆき解けにけり

また、かの地にありて、めづらしき材料を、多く得たれど、他日、持ちかへりて、諸孃への土産にすべしと、いひこされたり。諸孃、その心して待ちたまへかし。

●跡見女學校卒業式　四月三日、跡見女學校よては、卒業證書授與式を擧行し、校長花蹊女史の祝詞、また、卒業生總代角田四三子の答詞等あり。頗る盛會なりき。卒業生の姓名、左の如し。

千家國子　奥村八重子　松野利根子
三條篤子　大塚豊子　中村敬子
角田四三子　石井初子　佐藤嬉子
安田幸子　石田常子　福原梅子
良田幸子　牛込幸子　竹山靜子

●例の年廼舍歌會　二月十九日のは、左の如しとぞ。

當座探題

海邊霞　　前田利聲
うらなみのおとたづまりていそやまの
　まつもかすみてかくれけるかな

堤柳　　水野忠敬
すがの根のながきはるひもみあかねは
　つゝみになびくあをやぎのいと

歸鴈契秋　　增山三雪子
咲そめしさくらもみすてかへる鴈
　あきのもみぢはわすれざらなん

連日野遊　　鈴木重嶺

すみれつみつはなぬきつゝけふもまた
かつしか野べにあそびくらしつ

折蕨送人　江刺　恒久

あつさ弓はるの岡べのはつわらび
君がためよと手折てぞこし

都春曙　青木　修

東のみやこのそらのはの〴〵と
のどけさしるきはるのあけぼの

岡蕨　深川　照阿

岡こえのみちのさわらびつむとなく
たもとおもくもなりにけるかな

海邊春望　櫻井　尙保

なみよせぬひかたにむれてかひ拾ふ
をとめがすそにかすみたなびく

山家鶯　川島　宗端

山かげのしばのいほりをおのづから
はるになしたるうぐひすの聲

春月朧　佐々木昌綱

うぐひすのなきやむ花のこずゑより
おぼろににほふはるのよのつき

窗前梅　鈴木　重信

ふみまなぶまどのおもてに咲いでゝ
つくゑのしまにおくる梅が香

野春望　千野　千艸

わかくさのみどりのむしろしきはへて
野邊ははるこそのどけかりけれ

澤春駒　河合喜左子

さは水におふるゝせりやあさるらん

ところもさらずつとふわがこま

夕雲雀　小坂多餘子

夕ぐれのくものあなたになく雲雀
こゑこそおつれかすむはる野に

霞中春駒　宮木滿勢子

八重かすみふかくもたてる夕ぐれに
おぼろつき毛の駒もあそべる

夕春雨　飯田　稻子

あを柳のいとのしづくにしられけり
このゆふぐれのはるさめやふる

折梅　長瀬曾與子

みにゆけとかへるさをしき梅のはな
あかぬわかれにたをりぬるかな

月前歸雁　諏訪　晴子

さく花もかすめる月もよそにみて
おのがとこよにかへるかりがね

松間春月　諏訪　直子

おのづから庭のこずゑも春めきて
松にやどれる月ののどけさ

山家春曙　諏訪　忠誠

のがれすむ山はのどけしうき世をば
かすみへだつる春の明ぼの

花蔭雉　會主　諏訪　忠元

來てみれどわれより先にさく花の
こかげをしめて雉子なくなり

柳帶露　前田　利嗣

また、三月(ぐわつ)のは、
あをやぎのいとにぬきたるあさつゆは

さながらたまのゐゝちこそすれ
南部　利剛

いろもなきつゆやそめけんめをはるの
やなぎのいとのあさみどりなる
前田　利聲

あさつゆのかゝれるやなぎえだたれて
かぜふくごとにたまとちりぬる
水野　忠敬

はるさめのなごりのつゆをむすびつゝ
いろこそまされあをやぎのいと
南部　利恭

いろふかくみゆるもうれしあをやぎの
えだにかゝれるつゆのしらたま
増山　正治

ふくかぜにみだれもなさでにはのおもの
やなぎのえだにむすぶつゆかな
大田原一清

うちなびきちりもこそすれしらつゆの
たまをぬきたるあをやぎのいと
南部　明子

しらたまをかざれるえだとみるばかり
つゆもみだれぬあをやぎのいと
増川三雪子

はるさめのなごりのつゆかあをやぎの
なびけるいとにむすびそめたる
南部喜久子

ふきわたるかぜのたえまをたのみつゝ
むすびてゆうくつゆのをやなぎ

つゆむすぶうちたれかみのたまやなぎ
こやさはひめのかざしなるらむ　大岡　操子

建部　鐵子

あさつゆのたまをかざりてうちなびく
やなぎのかみのうるはしきかな　溝口久爾子

あさのあめのはれてのどけきやなぎはら
みだるゝつゆもおもしろきかな　増山喜三子

ゆふづきにみがけるつきのしらたまを
かざしてなびくのきのあをやぎ　南部　瀧子

うちなびくしたりやなぎのいとすぢに
むすびあまりてつゆぞこぼるゝ　南部　銈子

あさな〳〵おくしらつゆをたまにして
つらぬきかけしあをやぎのいと　大河内一子

わけゆかむちりもこそすれあをやぎの
いとにぬきたるつゆのしらたま　酒井　鉄子

のどかなるはまびもしるくうちたれて
つゆのたまぬくあをやぎのいと　鈴木　重嶺

はるさめのなごりのつゆのしらたまを
むすびとめたるあをやぎのいと　江刺　恒久

ぬきとめしやなぎのいとのつゆのたま
みだれぬさかりあさかせのふく
梅村　宣雄

あをやぎのつゆふきさそふかせもなし
いかにのどけきあしたなるらむ
青木　[illegible]

くちたれどはるをわすれずあをやぎの
つゆもみどりのいろにみえけり
深川　照阿

ふくかせにみだれむつゆのしらたまを
むすびとめたるあをやぎのいと
前島　逸堂

いかにしてむすびとめけむはるさめの
なごりのつゆのたまのをやなぎ

いけのへになびくやなぎのいとたれて
むすびとめたるつゆのしらたま
櫻井　尚保

ありあけのつきのしづくもそひぬらん
けさつゆふかしあをやぎのいと
川島　宗[illegible]

つゆむすぶやなぎのいとのうちなびき
たちよるそでもけさはぬれけり
渡邊　信古

はるかせのひまもとめつゝあをやぎの
なびかぬいとにむすぶしらつゆ
豐田　三叔

さながらにをるよしもかなわがかどの
佐々木昌[illegible]

やなぎのいとのつゆのしらたま
鈴木 重信

はるかぜよふきなみたしぞしらつゆの
たまぬきとめしあをやぎのいと
渡邊須磨子

うちなびくはるさりくればあをやぎの
つゆふきみだすかぜものどけし
荻野美佐子

はるさめのなごりかすめるあさばらけ
つゆもけふれるいとやなぎかな
河合喜佐子

あをやぎのしなひもながきえたことに
たまをぬきたるけさのつゆかな
小坂多餘子

めもはるにみどりのいとのいろはえて
やなぎにむすぶつゆのしらたま
後藤 象子

しらつゆのたまをむすびてさはひめの
てそめとみゆるあをやぎのいと
南摩 牧子

いけみづにまゆかきたるゝあをやぎも
けさはかざしつつゆのしらたま
藤井 靜子

あさひかげちゝにいろとるしらつゆを
たまにもぬくかあをやぎのいと
宮木滿勢子

かぜふかむつゆのしらたまこぼれなむ
つらぬきとめしあをやぎのいと

飯田以瑚子

うちたるゝやなぎのいとにつゆをおいて
　ひかりをそふるゆふつきのかげ

永瀬曾與子

ゆきかひのひとのたもとにこぼるらん
　すみだつゝみのあをやぎのつゆ

諏訪　晴子

ふくかせにこぼれてとまるはるさめに
　つゆのたまぬくあをやぎのいと

諏訪　直子

あさみどりやなぎのいとにぬきとめて
　つゆもみだれぬはるのあさかせ

諏訪　忠誠

ふくかせもをさまれるよのすがたとて
　やなぎのいとのつゆもみだれず

諏訪　忠元

かぜふかばこぼれんとするしらつゆを
　またしとつなぐあをやぎのいと

兼題

四月廿日
歌……水邊山吹
文……女子の衛生

五月五日
歌……竹亭夏來
文……端午の文

五月廿日
歌……薄暮松風
文……幼稚園を觀る記

教の庭

四月五日兼題　雨後花

天　愛媛縣新居郡西條町　川瀬きく子

降る雨をわたと思ひしこゝろさへ
　はれてうれしき花のいろかな

地　臨島縣桑折本町　吾妻ちか子

春雨のはれまうれしくたちよれば
　花のしつくもかほにほふなり

人　長野縣東筑摩郡鹽尻村　河野文子

しめやかにふりし小雨も晴初めて
　花のこずゑはいろまさりけり

さらぬだに名殘は見ゆる春さめに
　ぬれて色ますやまざくらかな　住山幾子

雨はるゝにはのかたいの糸ざくら
　しつくもにほふ心ちこそすれ　住山せの子

（天地人の外は原稿到着順なり）

雨晴し野邊はいかにと來て見れば
　人まちがほのさくらばなかな　安井章子

はる雨の晴れたる庭のうれしきは
　咲きそふ花のあれどなりけり　村田臨代

あがすみしはなにしわれば春雨に
　うつろふ色もながめられつゝ　村田美都留

はるさめのはれてゆかしき芳野山
　むかしの花のしのばるゝかな　海島定子

おほきみのみけしうるほす春雨の
　はれて色ますやまざくらかな　海島信子

雨はれてまた春さむくなりぬれど
　庭のさくらは咲きそめにけり　平野君子

あめはれしなごりの露も薫るなり
　さくらが岡のはなのさかりは　諏訪晴子

春雨のはれてのどけきゆふぐれに　溝口　寛子
にほひおくるか庭のさくらは

このゆふべふる春雨はとくはれて　西村　菊子
さくらの花もほころびにけり

春雨の晴れてうれしきゆふぐれに　西村とら子
匂ひおくるかにほざくらばな

春雨のはれてうれしきこのゆふべ　浦島　龜子
にほひを送るはなのさかりぞ

おきあまる雨のなごりの夕つゆに　浦島　榮子
しづくもにほふ庭さくらかな

はる雨の名殘のつゆのつゆごとに　島田　好子
花のにほひもいとゞまされる

はるさめの晴れし名殘の露ながら　芝田　秀子
よはのさくらをあかず見る哉

はるさめの名殘のつゆと吹く風に　楠　精子
こぼれて花のちるかとぞ見る

すゑたわむはな下枝のあさつゆは　松原　常子
きのふの雨のなごりなるらん

此夕べふるはるさめもはれたれば　野田千代子
にはのさくらぞ色ましにける

晴渡るあめのなごりのにはの面に　荒川　清子
ぬれて匂へるはなのいろかな

はるさめはいつしかはれて朧夜の　木村　兼子
月ににほへるはなのいろかな

春雨のはれて長閑けきあさにはに　吉川　禮子
にほひこぼるゝ花のうつくし

春雨の晴るゝをまちて出て見れば　遠藤　錦子
匂ひこぼるゝはなもあるなり

はるさめのはれし林のはな見れど　澤田　悦子
ぬれて匂へるさくらなりけり

春雨のはれゆくあとに咲きいでゝ　荒木　純子
にほひもゆかし山ざくらかな

あめはれしあとの名殘の露さへも　越山　雪子
にほふばかりに花さかりかな

霄の雨をなにいとひけん今見れど　長島　讓子
ぬれつゝかをる花もあるなり

春雨のなれにしにはのさくらばな　磯部つや子
ひとしほ色のそはりぬるかな

朝日かげにはへる山のはなはしも
　ふりにし雨のかたちなるらん　内田慶子

はれゆきし雨の名殘をさくらばな
　色あるつゆに見せてけるかな　高野辰子

はるさめの名殘の露にかせたちて
　にほひこぼるゝ花のいろかな　吉田芳子

おきあまる雨のなごりのしら露を
　同じはなともおもひけるかな　太田貞子

ことさらに花のにほひの深きかな
　雨のなごりのつゆにぬれつゝ　德永ます子

さくら花ぬれたる色にうつる日の
　ながめは殊にのどかなりけり　木下本子

今朝ぬれし物とも見えず雨晴れて
　ゆふ日に匂ふやまざくらばな　木下鈴子

あめはれて峯にのこれるしら雲と
　みしは咲そふさくらなりけり　羽田三緒子

朝ぼらけ雨ははるれどさくはなの
　匂ひはいとゞまさりつるかな　久野いき子

春雨のかたみにのこすしらたまを
　つゝむすかたの花ぞゆかしき　久野竹子

あめはれて露をふくめるさくら花
　朝日のかげにいろはえにけり　江嶋信子

日影さす外山のさくらおぼろげに
　かすむや雨の名ごりなるらん　植木鋼子

春雨のあまねくふるはさくらばな
　なべて盛りとなりにけるかな　館脇ます子

野も山もあまねくふりし春さめに
　花のいろかもまさりぬるかな　諸井久良子

春雨もかすみもはれてわがやどに
　ひらきそめたる八重ざくら花　大谷津こと子

はるさめにはなのつぼみも綻びて
　匂ひこぼるゝやまざくらかな　池永菊子

よひのまの雨の名ごりの白つゆに
　光りをそへてにほふはなかな　松浦糸子

さき匂ふ庭のさくらにつれ〴〵の
　眺めもはれてうれしかりけり　永井さい子

はるさめはおとなくはれて夕月の
　かげこそ匂ひはなのこずゑに　大橋てい子

春雨のはれにしあとをうち見れば
つゆに匂へるはなのあはれさ　藥師寺芳子

よひのまの雨にちりをバ洗はせて
浮世のほかににほふはなかな　川瀬しけ子

雨晴しさくらの木かげたちよれバ
ぬるゝもうれし花のしつくに　久松とく子

のどかにも咲出にけりはるさめの
はれにし後のにはざくらばな　河野照子

春雨のつゆに匂へるはなのいろは
あさ日にまさる心ちこそすれ　久松せい子

春さめの名ごりの露の木ずゑより
こぼれて匂ふにはざくらばな　矢野高子

はるさめの名殘のつゆも匂ふなり
今をさかりのはなのこずゑは　佐々有鄰子

春雨のなごりのつゆにあさ日子の
ひかりをそへて匂ふはなかな　高橋まさ子

よるの雨にぬれて色こきさくら花
いとふは春のあらしなりけり　藤澤もと子

さばかりはやつれざりけり櫻ばな
こゝろありてや雨もふりけむ　師岡千代子

うらめしと何思ひけんわがまちし
さくらは雨にほころびにけり　千賀しけ子

よもすがらふりぬる雨の跡見れば
きのふの花はけふのしらゆき　富士野安香

雨晴てにほふを見ればなかなかに
はなのいろこそまさり顔なれ　小野田のぶ子

雨はれて春のはやしを見わたせば
ゆきに見まがふ花ぞさきける　田中りん子

春雨のはれし外やまのみねになは
かゝれる雲はさくらなりけり　門野八重子

しをるゝと厭ひし雨のはれゆきて
今朝はさくらの花ぞいろそふ　能受重子

うれしくもふりにし雨の名殘ぞと
ぬれて色そふやまのさくら花　梶井久子

はるさめにぬれつゝ咲ける櫻ばな
晴れてのちこそ色まりさつれ　津田鞠子

春雨のなごりのつゆをいままバし
花にやどして見るよしもかな　畠山千代子

ふる雨や浮世のちりをはらひけん　木邨千代子
晴れてぞ花のにほひことなる

朝日影にほふさくらのしらつゆは　大海原芳子
ゆふべの雨のなごりなるらん

春雨のはれてののちのさくらバな　亀井しげ子
一しほいろのそひまさりける

咲にほふ庭のさくらはふるあめの　永井さい子
晴れて一しほいろ香ことなる

四月五日兼題　春の山ふみ

地　長野縣長野町　吉田芳子

夏の海邊秋の野邊を心行く限りにはいふめれとなは春の山ふみぞかりたのしきものはあらじ日も青柳の糸と共にやう〳〵のび行きそこはかとなく霞みそめたるあしたの景色に心の駒もいさみたちひとり野邊にあこがれて鶯の聲をしるべにたどり行けどいつしか身は蝴蝶となりて山路とも覺えず昇るともさとらずして高ねに至りぬたゞ白雲のかゝると見えしはなべて花の梢にてえならぬ香の袖にかほりくるもいと嬉しこゝかしこ草の莚におりたちて歌など打案せしが中々に人の笑草ともなるべければもらしつ

さてふもとの方を見渡せど所せきわが庭に似ず犀千曲の二川は西より東より來り合ひて北に流れこゝの里かしこの村はいふも更なりくれの山それの高ねにいたるまで霞のうちながらはるかにまよひきたるいとのどかなり折しも夕暮告ぐる山寺の鐘におどろきて立ちかへらむとすればおぼろの月影は端山にのぼりてさやけき花にさしそひたるなど云はむ方なしあくとしもなけれども今日なむ清國請和使李鴻章來りて談判開くべき筈なれどとくかへりて其有樣きかまほしく月をしるべに

月影は昔ながらに霞めども
國の光のそへる春かな

などロずさみつゝ家路につきぬ

人　下總國佐倉　植木鋼子

鶯のねに誘はれ春風にみちびかれいつしか家路も遠く雲か雪かと見まかふ花の山にわけ過てふみ行

岩根はみどりの苔地なめらかに常盤木は一入の色まして枝を交へ霞にくらき太谷の底を流るゝ水音いとのどけしやがてしばしいこひて里ある方にめ出はやどこゝかしこ廻りてふもとに下れば老たる杣人の薪負たるかいとよく咲たる山櫻の枝さし添て此方へ來りぬこはよき道づれこそ待たれと近より物語などしつゝ野邊のけしきを打詠めあかぬ間にはや夕暮近く家路のほとりへは出ぬいざや此所より別れんといへど翁さらはこれを參らせんにけふ山ふみのつともなしねばやとて彼うつくしき花の枝をさし置て去ぬ優なる人の情かなと心のよろこび限りなく一日つかれし足もいとかろく歸り着きぬ

磯部つや子

をりをりのあそびおほかる中にも春のやまふみばかり心のどかにおもしろきものはあらじ山鳥の尾上のさくら咲き亂れたる八重の霞のたな引けるかとわやまたれかくはしき花の下陰にまどゐして四方を見渡せば遠の海つらにはるばるとみつぎ物はこぶ船にやあらん眞ほかたほ風にまかせて行きかふさま見えてかしこきおほ御代の日々にいや榮え行くためしならんとおもふないとうれしこなたなる谷かげには時をえがほに鳴く鶯の聲もゆかしく聞えふもとをめぐれる清きながれにはうつろふ花のかげみえていかだうかべたらむやうなるもいはん方なくをかしはた歸るさ野邊をわけくれどおのがさまざまにもえ出づる若艸のけしきもすてかたきにしばしいこひてつばなすみれなどつみすさふほどに日もやうやく暮れなんとして入相つぐる山寺の鐘のゆくりなくひゞき渡るに驚かれてふと見かへれば今しもわけきつる山のはに夕月の影おぼろにはひ出たるたとへむかたもなしあなおもしろのあそびやなあなたのしの山ふみやよ

吉田　貞子

春の日は何處はあれど高き山を登るばかり心ゆくものはあらざらむ夕べよりそぼふりし雨の名殘なう晴れ渡りたるに朝日の影花やかにさしのぼりそこ

はかと霞みそめたるむしたの空のうらゝけさにもよほされていづこともなく分け入りしにいつしか莊周が夢の身となりのぼるともなくして山路にぞさ迷ひ入りぬる

只錦やかけるを見てしは並木の松のこまやかなるに桃櫻の花の咲きませたるなりけりいづらとも定めぬ呼ふ鳥の聲にひかれていよよ分け入るにいよよ樂しさの堺へかたけれど學びの道もかくやなど思ひ續けられてなんはる〳〵來し方をながむるになべて霞ならぬはなく只遠の山〳〵のみ朧げに見渡されたるさすがに春のさかりも見ねてをかし實にや風の香雲のたゝずまひも春の色にはもれぬなるべし鳥の聲水の流れも春の光りにはかくれぬなるべしおのづからなる調べ響きは高殿の小琴にも立ちまさりてなん松の木陰にいこひつゝ例のひるげしたゝむるに鶯の人目もはゞからでま近うなき出でたるなど都の苑にては得も及はぬ樂しみになんわけて心を廣やかにし身をすこやかならしむるわざなん春の山ぶみにしくものはなからんわれわかぬは山のながめかなと昔の人の言ひけんみやびならねどいとゞ殘りの惜まれて日の入相も忘れぬいざ歸らんとて下りにつきぬるに夕月の影山のかひよりほのめき出で雉子の聲たてたるなど家路の急かれぬも理りにてこそ

佐々有鄰子

のどかなる春の空鶯のこゑ織がごとく雉子のほろろと啼ねも青柳のいとしげきものから咲にはふ花はわかふる袖のあやをなし岩ほにかゝる瀧のいとは佐保ひめが小忌の衣や織いだすらんみるものきくものわけ〳〵てゆく春山の霞男の姿ゆかしく秋山のしたひ男はものかはと口さがなきことぞのはなをも今日の山ふみの家づとにわらびとゝもにをりそへてなん

藤澤もと子

朝な〳〵四方の山邊を見わたして棚引ける霞をながめそこともわかず吹おくる梅が香に何となう心もいさみ花鳥の音色を一日尋ねばやなどひとりてちぬる折しもわれ柴の戸をおとなふものありいそ

ぎひらき見れバ月比ねもころなる某々の君なりけりうれしさたとへんものなくまづおくへせうじかたみに思ふ心をのべさゝめく某の君いはくけふこそは空もうらゝかにて春の風さへいとしづかなれど天神山に登りてんやと某の君げにもとのたまふわらはもしか思へるきはなれどこよなき事とうへなひすぐにわりこなどとゝのへあまり高からぬ山なれどとて稚き子もともなひいそぐこの山は去年九郡聯合水產共進會の會場とせしほどなれバ坂路屈曲のさま面白く俗に九十九曲といふ路のかたはらに若草もえ出てそが中にふきのとうすみれたんぽなど時知り顔に咲出でたるさま得もいはれずまた梅花もほころびそめきよき香鼻をうちうぐひすはこぼるゝ如き聲にてわらはらをむかへるが如しやがて天神山に登り天滿宮ををろかみぬ山の上は平らかにして恰も靑き毛布をしきわたしたるが如く見おろせど盛の里の人家櫛比し大船渡灣には百八十の船の帆檣林の如く磯邊にはもしはやく苦屋の煙たえ〳〵に見えていとおもしろしこの山眺望

の佳なる實に郡内屈指の勝地なるに櫻樹も亦多く樹に皆紅をふくみまさに唇を開かんとせり梅花は今を盛りと咲滿ち香は山にも谷にもはびこれりこゝに共進會のときの休憩處のみ存せりこゝにてもたらせるわりこをひらく美酒佳肴はなきも味の美なる事よと皆々舌づゝみならしてたうへおはりぬふと山の脊の谷の邊りをあさりゆけバ里のうなゐ子らが霞の中に見ゑかくれうたをうたひつゝ若菜摘むさま面白く見ゆいてわらはらも家つとに若菜つみてんとてかたみにあまるほどつむもめつらしくげに長き春の日のかたぶくをも忘れ山寺の鐘の音の暮をつぐるに驚きて家路につきぬれバはや山の端に新月えがくが如くおぼろげにわらはらのかへさをてらせりやがて友どちとたもとをわかち柴の戸に歸りつきぬきようのあまりともしびをかゝげてけふの山ふみをしるしぬ

くるゝまで松の山邊にあこがれて
若菜摘みつゝかへさ忘れつ

梶井　久子

そこはかとなく霞わたりていと長閑なるにかくていたづらにあらんも心なきわざなり誰にてもあれ訪ひ來かしいづかたへなりとものして夢に見えし花のおもかげ尋ね見ばやと獨ごつ折しもふとおとづれしはわがたまはへる友なりけり嬉しや今しかしかなん言ひ侍りしといへばさればなり春日わたりははや蕨ももえつらん花も盛りなるべし奈良見物をかねて今より立出んはいかがそそのかしまゐらせんとてなんどいふにさすが近くもあらねばとかうかうがへてあすにてはといへバあな心ながき君にもあるかな夜の間の風もうしろめたらあすの天氣もはかり難し思ひたつ日ぞ物事はよきのいざいざと急がしたつるにもとより願はぬすぢならねば諸共にたちいでゝ湊町より汽車にうち乘りてゆくゆくそこゝとうち見やれどをかしき處多かるが中に殊にあはれと見しは龜の瀨の清き流生駒志貴の高根なれど心にまかせぬ車のうちは下りたちてむすばん水もなく上りて手折ん花もなしとかくいひつゝやう〱奈良につきぬ二人ともならはぬ旅なれどいと心もとなくこゝにとひかしこにたづねて開化の帝の陵を伏し拜み興福寺に平氏の昔を忍び南圓堂にしばしいたひさて猿澤の池に藻くづと消えしそのかみをあはれび大佛殿に佛すさびの古をとひやう〱春日野につきぬわりでなどの心がまへもなければ武藏野といふ家にてひるげものしつ春日野に武藏野といふ名こそをかしけれさては紫に深きゆかりの家にやなどうち興じつゝ春日山にいたる畫にかきたらんやうなる山のたゝずまひなだらかにしてこゞしからずこゝの岩間かしこのはざま流るゝ水の音ものどかに梢より梢にうつる鶯の聲も思ふ事なげなりしばしやすらひて清水をむすぶ折しもいづこよりか鹿あまたむれ來て身ぢかく居るに驚き徃かんとすれば右左よりそひて返らんとすればまたかへるあないとはしかゝるものをとてわたりにひさぐ菓子など與へさて上りつゝ見あぐれば今をさかりの山櫻高峯にかゝる雲かとあやしまれ見おろせバ木の間木の間のあられ藤時しらぬ雪かと疑はる休らひては上り上りては休

らひやう〳〵御社のひろ前にいたりぬかづきて御軍の行末を祈りさてあたりを見れど藤の若葉もえそめて盛の折はさこそと思ひやられぬいよ〳〵分け行けど杉の下道奥深くしていとものすごし三笠へいづる道とはきけどおそろしさにえ通らずもとこし方へひきかへしめづらかなればとてあられ藤を手毎に折りしのびやかに春の山路の曲を歌ひて山を下るそのおもしろさたのしさいづれの時かこれにしかんかくてやうやう三笠山にいたり蕨を折るうち日は西山にかたぶきぬあかぬものから女のみにてしらぬ家に宿らんも心ぐるしまたこそとはめとてたちあがれば春日の鹿三笠の花われを止めがほに見ゆるぞなつかしきや三條通より氣車にて天王寺へかへりさてわかれて家につきぬ夜もいたくふけにたればみは臥床に入るものゝ夢はなほも春日の山をめぐり鹿をまねき花を手折りて明けはてぬ

謹みて告ぐ

本誌數發行期を誤り諸嬢愛讀の厚意に反くて誠に甚し部員一層奮勉して定期に發行せんとするも到底一回休刊するに非ずば能はず依りて四月に限り一回休刊し爾後毎回期を誤らず發行せんとす冀はくは諸嬢其の心してよ

附けて言ふ四月二十日兼題歌文は五月五日のと共に五月五日發行第八十五號に掲ぐべし

寝ても起きても、露ほども忘るゝことなく、思はぬことなく思ふものは、子のことなり。然るに親の心子知らずと諺にも云ふ如く、子たるものは、左程までに、父母が已の事を思ふとも知らぬが世におほし。されバ、親の諫をも聞かず、敎をも守らず、我が心のまゝに振舞ひて、一しほ親の心を惱まし、或は不孝に不孝を重ねて、終には親にも見放さるゝに至るものあり。子たるものは、心の限り力の極み、孝行を盡くし、恩義を思ひても、猶萬分の一にも足らざるを、まして然る行ありたらむには、鳥獸にも劣るものなり。烏に反哺の孝ありとて、烏さへも親に養はれし間の年月は、又親を養ひかへすといへり。又鳩に三枝の禮ありとて、鳩は親の留りたる枝より、三番目の枝に留りて、尊敬の意を表すとぞ云ふなる。人として此の烏鳩にも劣らば、何ぞ生ける甲斐あらむ。されバ、子たるものは、假令親の恩には及ばずとも、及ぶだけは親を思はざるべからず、親の子を思ふ思は、世の中の恩の第一なれバ、子も亦、世の中の恩の第一よ、親を思ふべきなり。苟も親を思ふこと、他の恩の次にあたらむには、其れぞ不孝の始にはありける。

兼輔朝臣

人の親の心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな

やみとは、暗のことにて、前後左右見分くることの出來ぬ樣に、暗き夜のことを云へるなり。○まどひとは、迷ひなり。如何にして善きか。暗の夜に道を行く如く、何も見分くることの出來ず迷ふことを云ふ。○一首の意は、世の中の人の親の心は、暗夜の如く、眞暗なるものにはあらず。義理も道理も、何もかも分りて居れど、子を思ふ時は、義理も道理も何もかも、譯の分らぬ樣になりて、迷ふものなりとなり。

親の大切に思ふものは、子が第一なり。親の思の中にも、第一の思も、亦子にあり。此の如く大切に思ふ子の爲には、親も心を迷はして、耻をも義理をも忘るゝに至るは、恩愛の情の深厚なればなり。假令ひ我が子の、他の小兒と喧嘩などして、或は打たれ、或は傷けられ、或は悲しき目に遭ふことなどを見る時は、たとひ其の子が惡しき事をせしにもせよ。烈火の如く怒りて、其の小兒といさかひ爭ひ、後には互の親と親と、諠譁をもするに至ること、世に間々あることなり。是子の爲に、親の心は暗になりて、耻も義理も顧みざるに至るものなり。是甚をて

がましき親の振舞の樣なれども、我が子を思ふ恩愛の道は、正に此の如くならざるべからざるものなり。されど、子たるものも亦、此の如く、親を思ふ心は、暗にもなる樣に、大切に思はざれば、親の罰を蒙りて、己の子も亦、我に不孝をなすに至りぬべし。

菅原道眞母

久方の月の桂もをるばかり家の風をも吹かせてしがな

久方は、月の枕詞なり。○月の桂とは、月の中に桂の木生へたりと云ふ諺あるより、此くは云へるなり。○をるばかりは、折るゝほどなり○一首の意は、我が子が成長して、世に勝れたる人物となりて、月の中に生へて居る桂の枝も折るゝほど、我が家の風を吹かせて、雲の上まで名譽を耀かしたきものなりとの意なり。

父母は、未子の胎内にある時より、萬事に注意して、耳に惡しき聲を聞かず、目に惡しき物を見ず、切りめ正しからざれば食はず、坐するにも側らざる樣にして、敎育に志ざし、己に生れて後は、一しほ心を碎き、永き年月の間、少しも怠ることなく、倦むことなく、骨を折り力を盡くして、養育するは、果して何の爲ぞや。

他なし。其の子の成長して、世に勝れたる人となり、名を千載の後に垂れ、父母の名を顯はし、榮え行かむ末を見て、樂しく餘年を送らむと思ひてなり。苟も人の親として、其の子が惡しくなり、世にも數まへられざる樣にならむことを欲するものあらむや。菅原の道眞公は、此の如く、母の望まれしを心に確と思ひ取りて、知識を研き、藝能を習ひ、勉め勵みて忠義をつくし給ひしかば、遂に月の桂も折るばかりに、家の風を吹かして、今日まで神にも祭られて、世の人に仰ぎ尊まれ給へり。苟も人と生れたるものは、如何に愚鈍なりと雖も、誠心確乎として、堪忍勉強する時は、誰の人か名を爲さゞらむ。然るを、彼は之を能くすれども、吾は能はずとて、勉めざるは、自我が身を棄つるものなり。世の子たるものは、此の菅公の如く、名を立て家を起こし、父母の名をあらはさむことを勉めざるべからざるなり。

讀人知らず

旅人の宿りせむ野に霜おかば我が子はぐゝめ天のたづむら

天のたづむらとは、鶴は多く群れて、天を飛ぶものなれば、かくは云ふなり。む

らは、むれと同じ。○一首の意は、我が子が家を出で丶旅の空にあれば、大方行き暮れたる野に、宿を去て寝ぬることならば。然るに、野中なれば、上に覆も何もなからんに、若霜などの降りたらむには、如何ばかり寒き事ならん。されど、天に飛ぶ鶴の群よ。汝は鳥の中にても、尤も子を大切に思ふ鳥なれば、我が子の寝たる野におりて、何卒其の廣く大きなる羽に含みて、風などを引かぬ樣にかはゆがりて呉れよと、旅の空に居る子を思ひやり、外に詮方もなければ、空を飛ぶ鶴を見て、之を依頼せし歌なり。

父母は、子よりかはゆきものなく、朝夕膝下にありても、風雨寒暑につけつ丶、心配し給ふものなれば、まして遠き境に旅立ちて、行きし時などは、夜もいねずして、心を勞し給ふものなり。されど、子たるものは、旅中にありては、一層注意して、先我が身の健康ならんことを計り、父母には絶えず音信して、我が身の無事を報じ、又、父母の安否を訪ひ、其の苦勞を皆無にすることは能はぬとも、成るべく心を慰め、配慮を少くせむことを勉むべし、又父母は何よりも、病氣を第一に心配し給ふものなれば、常に攝生を行ひ、疾病などにかゝらぬ樣に、尤も注

意すべきなり。疾病は不慮の禍にて、如何ともすべからざるが如くなれども、多くは攝生を怠るより起こる。外より來る疾は少し。故に疾にかゝるは、親に對して尤も不孝の甚しきものなれば、謹みても謹むべきことにこそ。

坂田部首麿

眞木柱はめて造れる殿のごと居ませ母とじおめがはりせず

眞木柱とは、檜などの良材にて造りたる柱なり。○はめて造れるとは、良材を以て柱としたれば、幾年を經ても動くことなく、變ることなかるべしと、稱讃して造りたるとなり。○母とじとは、母樣と云ふに同じく、とじは稱めて云ふ詞なり。○おめがはりとは、面がはりといふに同じ。此の歌の詞は、單に母の事をのみいへども、父母をかねて見るも差支なかるべし。○一首の意は、材木の中にても、尤、強堅にして美麗なる檜などを擇びて、行く末久しく賞め稱へて造りたる宮殿は、千代萬代も立ち榮え行きて、少しも變ることなきものなり。其の宮殿の久しく變らぬが如く、何事もなくして、強く健に、顔色なども聊か變らせ給ふことなく、若き時の樣にして生きながらへおはしませ。父母よと云ふことなり。

父母の、我を生み我を育て給ひて、人となし給ひし間、如何バかりの劬勞をかなし給ひぬらむ。子たるもの子細に之を顧み思はゞ、感涙に咽ぶより外あらざるべし。先十月の間、母の胎内にある時より、己に生れ出でゝ三歳の間は、懷の中を離れず、這へバ立て、立てば歩めと、引き延ばす樣にし、怪我過などのなく、又疾病に犯されぬ樣にと、神に祈り心を碎き、晝夜氣を安め給ふことなし。父は直接に腹を痛め、苦勞をし給はざれども、母の懷姙し給ひしより、一日半時たりとも、心氣を煩し給はぬことなければ、母にも變らぬ深き御恩あるものぞかし。漸漸成長するに從ひては、父母共に心を添へ力を協せて、學問を敎へ職業を習はしめ、世に勝れたる人となり、功を立て名を成し、家を起こし、祖先父母の名までも顯はす樣にと、朝夕心づかひし給ふこと、口にも筆にも述べ盡くす所にあらず。故に父母の恩は、毎日、父母を左右の肩に荷ひて、須彌山を巡ぐるとも、報い難しと云へり。實に山よりも高く、海よりも深しと云ふべきなり。かゝる深高なる恩の露によりて、成長したるものなれば、子たるものは、如何にもして、之が萬をも報い奉らざるべからず。之を報い奉るには、一朝一夕の能く盡くし得る所に

あらず。且漸く成長して、聊ゝも孝を盡くし得る樣になりたる時は、父母は年既に老いて、其の齡次第に傾き給へれば、如何に孝を盡くし、恩に報いんと欲しても、其の心の半をも果すこと能はず。故に子たるもの丶身に取りては、此の父母の身體の日をに衰弱し給へるぞ、悲しきことの限なりける。されど、此の歌の如く、千代萬代も顏色變らせ給ふことなく、いつ迄も强健にましまさば、子たるもの丶喜は、如何ばかりにかあらむ。是にますものは世にあらざるべし。さりとて年月は止め得べきものにあらざれば、朝夕父母の萬歳を祈り、常に孝養怠らざる樣に心を注ぐべきなり。

市原王

春草は後はうつろふいははなすときはに居ませ尊きわぎみ

移ろふとは、移り變りて衰ふるを云ふ。○巖なすは、いはほの如くなり。○常磐とは、幾千年經へても常に變はらぬことを云ふ。○わぎみとは、吾が君と云ふことにて、此處にては、父母をさして親み云ふ詞なり。○一首の意は、春の草は、綠の色青々として、誠に盛なるものなれども、夏立ち秋されど、次第に移ろひ變は

りて、衰へ行くものなり。されど、我が父母は、彼の春草の一時榮えて後に移ろふ樣に居ますことなくして、大いなる巖の幾千年經ても動くことなく、變ることなきが如く、常盤に堅磐に、何時までも今の儘に、面變りし給ふこともなく、榮えおはしませ、尊き我が父母よと云ふことなり。

凡て、天地間にありとあらゆる事物は、皆變遷せざるものなし。新陳代謝、盛者必滅は、世の習なれど、理屈上より云ふ時は、敢て悲むにも足らず。又恐るゝにも足らざるべし。然れど、情愛より云ふ時は、往々理屈の通りには行かぬものなり。父母は、我より先に生れ給ひたれば、我より先に衰へ給ふは、理の當然にして、敢て悲み恐るべきものに非ざるべけれども、子の身に取りては、是より悲しく恐ろしきものはなかるべし。是人の情なり。若し父母の衰弱し給ふを見て、恬として顧みざるものは、是情なきなり。情なきものは木石なり。されど此の如き人は、人の皮着たる木石とや云ふべからん。然りと雖も、天地の理は曲ぐべからず。如何に悲み恐るとも、父母は我より先に衰弱し、我より先に死し給ふことなれど、子たるものは、其の萬歲を祈ると共に、あらかじめ此處に注意して、父母の強健

にまします間に、出來得る限の孝養を盡さんことを思はざるべからず。然らざれば、後に至りて、如何に悔悟すとも、其の甲斐なきに至りぬべし。

平景隆

おほし立てし親なかりせば如何にして君の惠を吾は受くべき

おほし立てしとは、成長せしめしと云ふことなり。〇一首の意は、我を生み我を成長せしめし、父母ましまさずば、今日此の世にありて、如何にして君の惠を受けて、此の如く立ち榮え行くことを得む。父母の恩は、實に潔厚なるものなれば、暫くも孝養を盡さずしては、子たる道を盡くしたるものには非ずとなり。

日本國中四千餘萬の人民か、或は、官途にありて事務を執行し、或は、農となりて田畑を耕作し、或は、工となりて物品を製造し、或は、商となりて之を交換し、皆各其の事業を得て、安樂に生活することを得るは、果して誰の惠なるか、皆天皇陛下の御恩澤にあらざるはなし。而して此の優渥なる御恩澤に沐浴することをは、父母ありて我を生育し給へばなり。如何に雨露の如く、御恩澤は天下に普しと雖も、此の國に生れざらんには、更に享受することを得ず。之を思はゞ父母の

拜啓益御盛大奉賀候候引續き御引立を蒙り辱く深謝仕候陳ば會計主任者氏名及使用印形供貴覽候間將來は乍御手數金錢御受拂の事は勿論會計上の御用は必下名の者へ御宛被成下度且金錢出納は左の印形を以て本社の證と御認め被成下度此段得御意候草々敬具

會計主任者
成澤唯次

明治二十八年三月

國光社圖書部

女鑑第八十二號目次

〔明治二十四年八月八日内務省許可 明治廿五年三月十二日遞信省認可〕

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及逓運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證出さず金員領收の上は直ちに女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑
毎月二回五日廿日發行

定價壹冊金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金二十錢

明治廿八年四月二十二日印刷
同　年四月二十三日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衞
同
編輯人　山根勇藏
同
發行所　國光社

(印刷所　東京國光社印刷部)